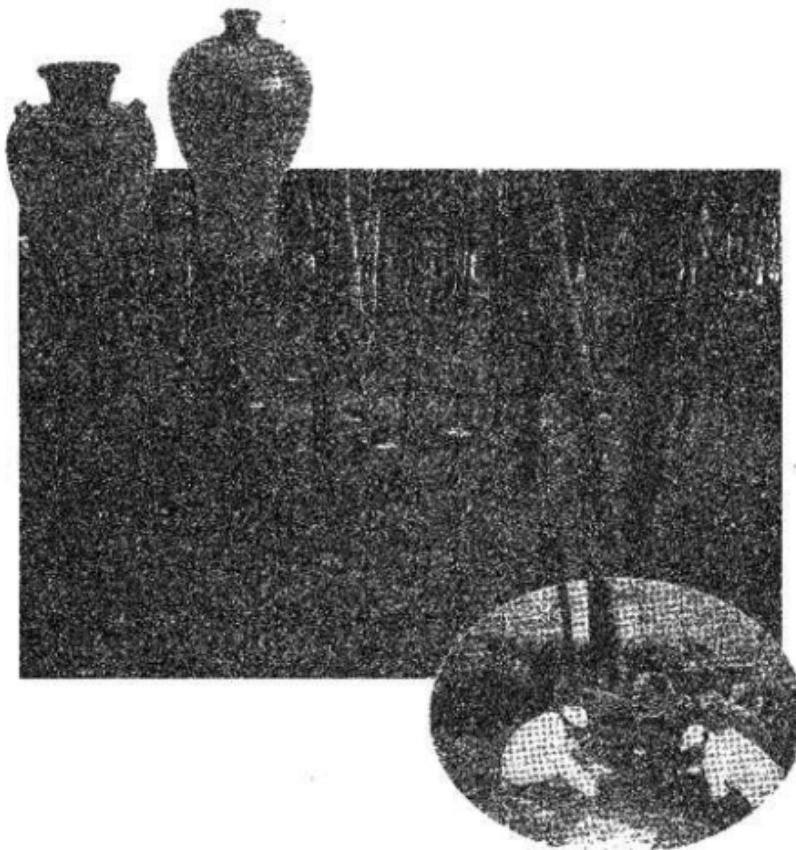


若澤寺を探る I

元寺場遺跡

～元寺場遺跡調査報告書～



長野県波田町教育委員会



元寺場遺跡 ～元寺場遺跡調査報告書～

長野県波田町教育委員会

はじめに

元寺場遺跡は若澤寺の前身と考えられ、堂跡と思われる礎石や、建物が建てられたと考えられる平場が残っており、後世の破壊も少なく、保存状況も良好です。

鎌倉時代の古瀬戸も出土しており、県内では伝承を除けば、年代の判別できる屈指の山岳寺院の可能性が高いと言われています。今回の元寺場遺跡調査は、第1次若澤寺総合調査と位置づけ、地形図の作成、試掘調査等、基礎的調査を行い、寺跡の造構内容を知り、将来の保存・保護・活用を検討するために実施されました。

○ 平成11年度

- ① 遺跡面積の確定
- ② 遺跡地形図の作成
 - ・測量面積 31,500m² 縮尺 1/500
 - ・委託業者 株式会社 写真測図研究所

○ 平成12年度

- ① 遺跡試掘調査
 - ・調査対象面積 8,000m²
 - ・調査方法 トレンチ法による。
- ② 植生調査

○ 平成13年度

①出土遺物整理及び図化

- ・ 整理関係 教育委員会
- ・ 図化委託 株式会社 写真測図研究所

②報告書の作成

- ・ 印刷部数 300部

今回の調査は、波田町教育委員会が主体となり、以下の組織によって進めてまいりました。それぞれ職務等お忙しい中、多大なご協力をいただき、心から感謝申し上げます。尚、元寺場遺跡の土地所有者あります中信森林管理署の方々、遺物の解説作業にご協力いただいた県立歴史館の皆さん、火葬骨の鑑定をしていただいた京都大学盡長類研究所・茂原信生先生、地形図の作成等に当たられた、委託業者である株式会社写真測図研究所の皆さん、その他、本調査にご協力いただいた多くの皆さんに、この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

波田町元寺場遺跡調査組織

(平成11年4月～平成14年3月)

○調査員 百瀬 光信、波多腰忠行、浅田信一郎、古畠 繁實、

百瀬くに江、古田 咲美（以上、文化財保護委員）

田中 昭三、山口 琴三、蒲生 鏡

（以上、前文化財保護委員）

松田 行雄、横内 文人（以上、植生等調査員）

○調査指導 笹本 正治（信州大学人文学部教授）

牛山 佳幸（信州大学教育学部助教授）

市川 隆之（長野県埋蔵文化財センター調査研究員）

原 明芳（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

現・菅野小学校教諭）

○協力者 大月 康雄、藤澤 高雄（町調査員）
小松 繁、岸 裕介、片山 晃夫、野尻 浩子、
石川 仁子、塩島 弘治、小野 剛人
(以上、信州大学学生)

○教育委員会事務局

教育長	関 義弘
教育次長	蒲生佐和子
生涯学習課長	中野 秀寿 (平成12年3月まで) 平林 良一 (平成13年9月まで) 麻田 仁郎 (平成13年10月から)
生涯学習課	山本 政己 斎藤美穂子
総務学校教育課長	古波田 守
総務学校教育課	中村 淳子 (平成13年3月まで) 波多腰美和子 (平成13年4月から)

幻でなかった元寺場遺跡

大月 康雄

昭和52年、町誌編さん委員会が発足し、専門部も幾つかの班に分かれて、調査研究が進められていました。その中の歴史班は、昭和53年11月16日、「元寺場は単なる伝説だ。行ってみたけど何にもない」との言葉を背に受けながら、少年時代の「山の中に、何でこんなに大きな平地がいくつもあるのだろう。」という疑問と、「昔、国有林を払い下げてもらい、炭焼きをした時に瓦が出てきた。」という古老の話を頼りに、白山山頂近くの「(本)元てらば」なる俗称地名が、廃寺跡を物語るかどうかを確かめるため、踏査をしました。

その結果、広大な平地(棚平)の山腹寄りに、土を平面方形の壇上に盛



昭和55年11月1日松本営林署員(左から2人目)
現場視察

稱「(本)元てらば」の実在が確認できたことに興奮を覚え、より精度の高い町誌とするためには、一つでも多くの資料収集が不可欠と願っていた私たちは、次回からの踏査に夢をつなぐことができたのです。

旧松本営林署の理解と、日本考古学協会の大久保知己先生の指導を得ながら、昭和54年10月29日には、主たる平地(棚平)4ヶ所の見取図を作成するため、測量と遺物の表面採取を実施。昭和55年9月26日と11月14日には、周辺の平地(棚平)、水場、釜場跡等の測量と遺物の表面採

取を実施しました。昭和56年11月には旧松本営林署員立会いのもと、土壇北側の一か所でトレンチ調査をしました。5回に亘る調査の中で得た遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・天目・鉄釘・石鉢・宝珠等で、釜場跡から採取されたコークス状の塊については、専門家の鑑定により、油粘土か、ヤニ粘土を作った時の残存物ではないかとの報告を受けました。

調査によって判明した遺構、遺物の一つ一つは、寺院の建立時期を考察する上で、重要な意味をもつものですが、時代差のある遺物が、同一廃寺跡から発見されたということは、曖昧模糊とした、この時代における波田の歴史の流れが、点から線へとつながる意味でも貴重な資料となつたのです。

私たちの住んでいる波田町は、町の中に遺跡があるのではなく、遺跡の中に町があるとさえ言われています。ひっそりと地下に眠っていた遺構、土器や石器等は、一見地味なものであります、過去の生活や文化を物語る、貴重な価値を秘めていることを、改めて認識し、先人達に思いを馳せる次第です。

※ 元来、伝説だ、幻だと言われた、波田町内の元寺場遺跡の調査が始まるきっかけは、昭和53年の町誌編さん時にさかのぼります。その時の様子について、当時、町誌編さん委員で、その後も元寺場遺跡の調査に尽力された大月康雄氏が、昭和57年の館報はたまちに連載されていた「町誌こぼれ話」で書いています。今回、その原稿を教育委員会とともに加筆、修正しました。

御堂ヶ原より穗高連峰の遠望（昭和55年当時）



元寺場遺跡の発掘調査

市川 隆之

1 遺跡の概要

梓川が松本平に出るあたりの南御山中、水沢沿いにかつて「若澤寺」という大寺があった。江戸時代に「信濃日光」と呼ばれるほどの寺だったが、明治時代の廃仏棄釈で壊され、現在は寺の痕跡とゆかりの古仏・小堂がいくつか残るのみである。

伝承によると、この若澤寺は白山山頂(1372m)付近の「大堂ヶ原」にあったものが大同元年(806)坂上田村麿により下方の寺場に移され、やがて山麓の寺地へ移ったという。今回発掘した「元寺場」は山頂から少し下った標高1250m付近にあり、若澤寺が山麓へ移る以前にあったとされる場所である。ここは人工的な大きな平場に堂跡の礎石が残り、神・仏一体で信仰された時代に山への信仰によってつくられた、いわゆる「山岳寺院」跡とみられる。なお、白山山頂にも小さな平場や川原石の散在があ



写真1 元寺場遺跡の遠景



写真2 元寺場遺跡(中央左より、後ろは白山)

り、何らかの施設はあったようだ。先の伝承は信じがたいところもあるが、白山山頂—元寺場—若澤寺は白山信仰の歴史のなかでそれぞれ役割を担っていた場所だったんだろう。



写真3 白山山頂

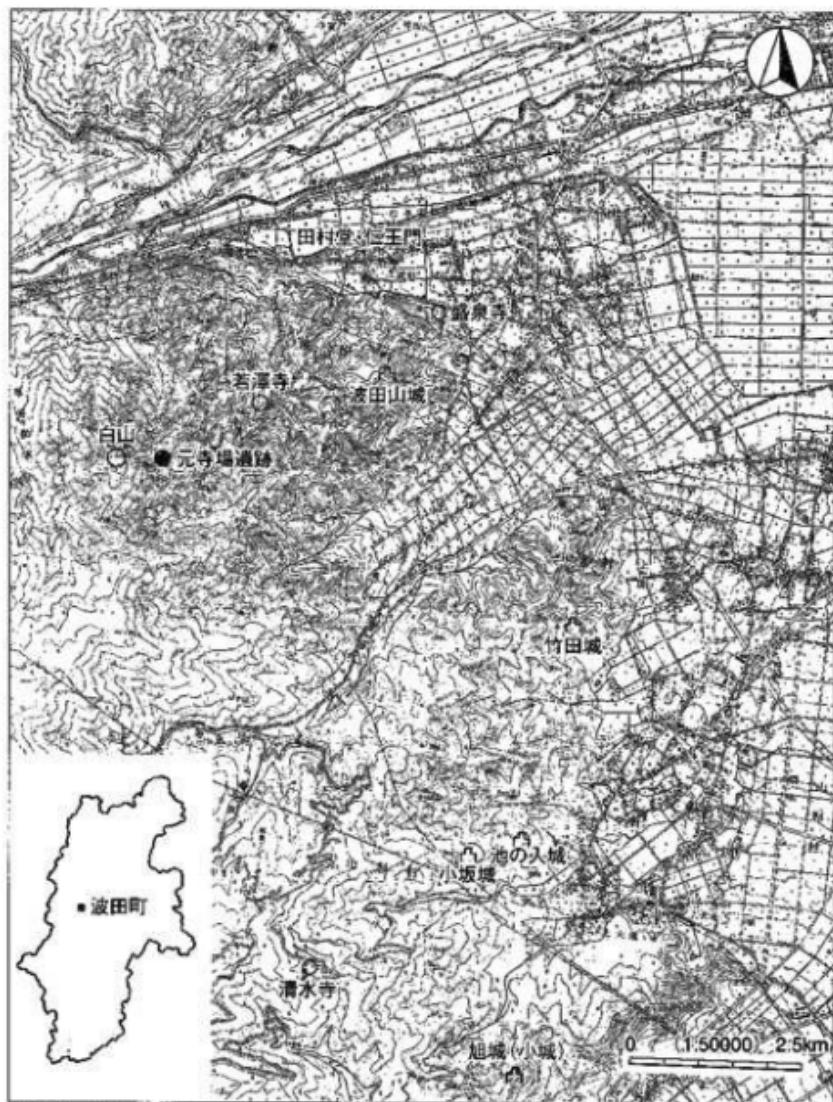
2 遺跡の現状—遺跡内を歩く—

元寺場遺跡は白山山頂から少し下った尾根脇の傾斜が緩やかな場所にある。西・北は尾根に取巻かれるが、南・東は開けて波田から松本方面が望める。この遺跡は4つの平場が集まって全体として東西75m、南北約140mのやや隅の丸い長方形の土地が形づくられている。平場の配置は平場2・1・4と呼んだ広めの平場がほぼ南北に並び、一段下がった南東側に細長い平場3

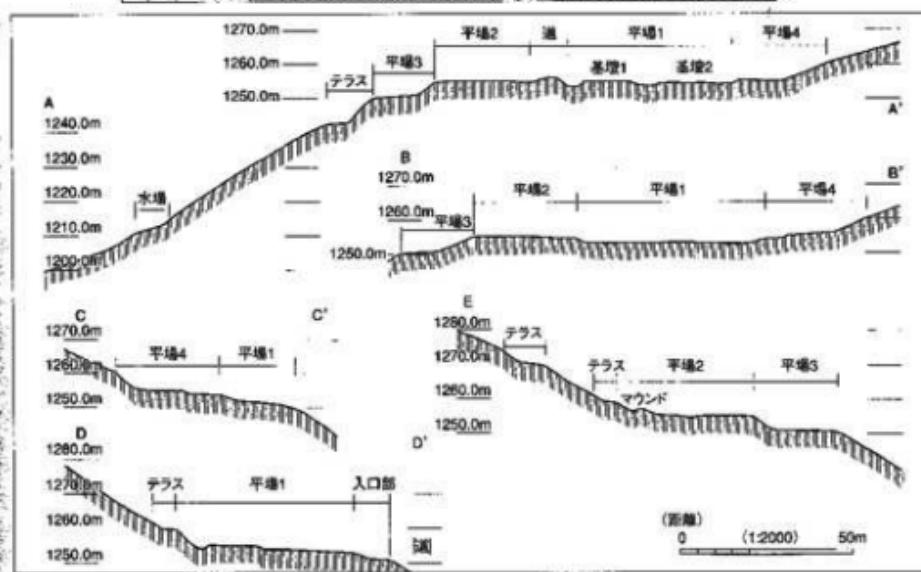
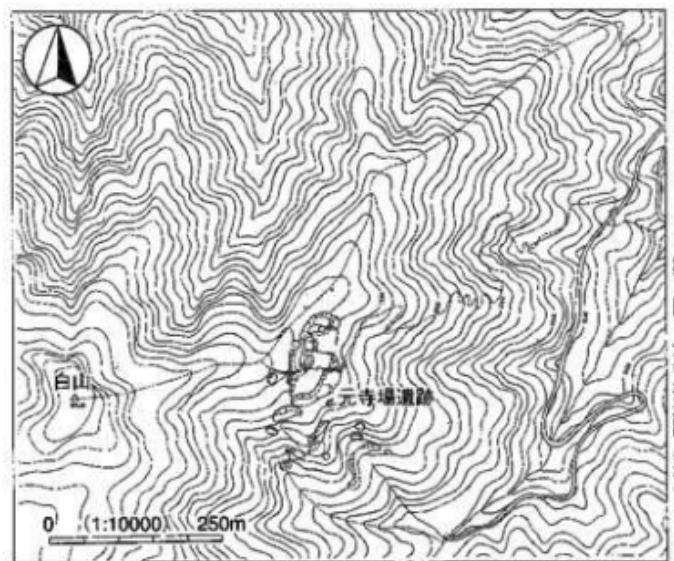
がある。そして、この周囲や南・南東側の谷内・尾根上には帯状や三角形の小さなテラス状平場が散在し、やや下方の谷内には湧き水のある水場が2箇所ある。

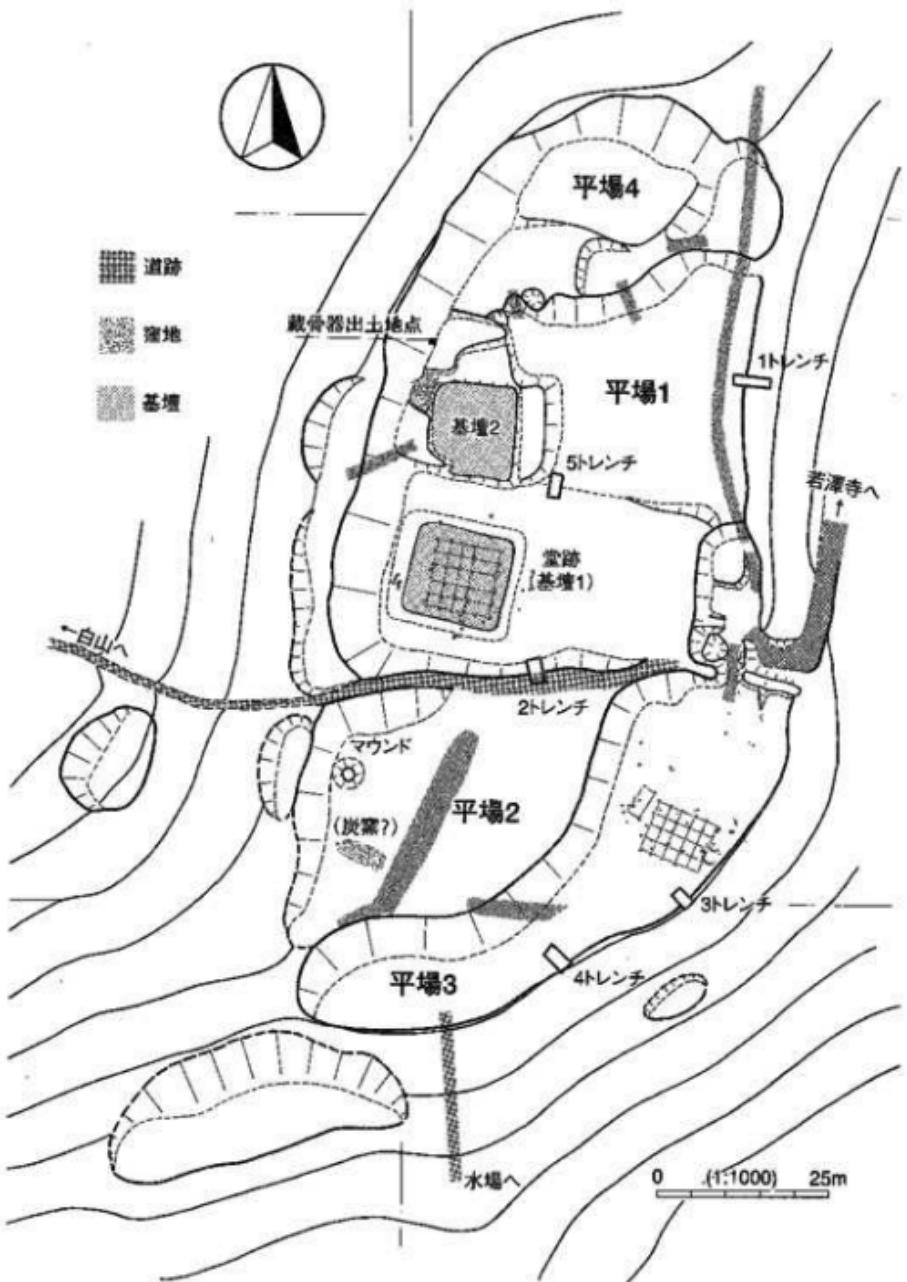


第1図 南東方向より見た元寺場遺跡



第2図 遺跡の位置



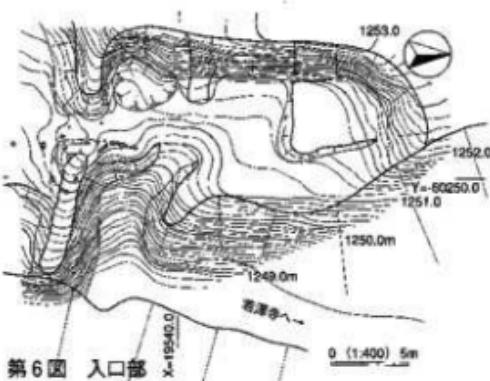


第5図 元寺場遺跡の中心部のようす

この遺跡に残る道跡や入口施設から参拝の流れを想像すると、参道を登って東側中央の入口部に入り、二つに分かれる道を右側に回り込んで平場1の堂跡の前に出て、その横の白山へ登る道へ進む流れのようだ。つまり、山麓の若澤寺と白山山頂を結ぶ道が遺跡内にとり込まれていたようすが見受けられる。次に遺跡を歩きながらみてまわろう。

入口部（参道入口）

現在、元寺場遺跡へ行くには林道をどん詰まりまで登り、南側の水場のある谷から登るのが楽である。しかし、かつての参道は東側斜面を登って元寺場遺跡東側中央から入るものだった。この参道のたどりつくところに入口施設があるが、ここを仮に入口部と呼んでおこう。現在ここには、



遺跡を示す白い標柱が建っている。

入口部は一段低く造られた四角い箱状の場所で、参道が北北東から登って左に折れてここに入り、平場1へ行く北の道と、南に折れて平場3に入る道に分かれる。平場3への道は脇に石列があり、平場3との境に土壙が設けられる。この土壙の役割はよくわからないが、土壙があることで入口部は独立した空間となっている。このような折れる通路や土壙が設けられている姿は山城の虎口（敵が入りにくくした入口施設）に見紛うが、直接関係するとは言いきれない。

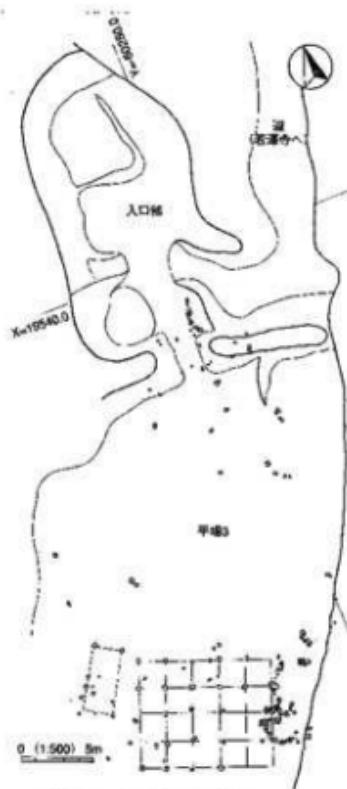
東斜面を登って東中央から入る理由は詳しくわからないが、参拝の方位に関係するようである。例えば、堂跡は東から拝むようにできており、その脇の白山へ登る道も入口部の参道の折れるあたりの西延長上には

真西へ向かう形である。つまり、この遺跡では基本的に東から西を拝む形が貫かれており、これが堂跡の東前に入口部が設けられた理由に思える。また、ここに独立した入口施設をつくった理由は、元寺場遺跡が白山への通過点ではなく、寺として独自の範囲を有するために門のような外界から境内に入るための緩衝的な空間が必要とされたからではないだろうか。ただし、門施設は確認できていない。

平場3（入口南側の細長い平場）

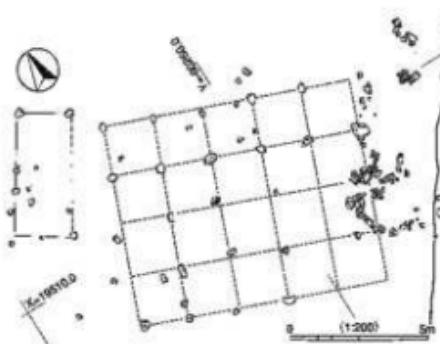
入口部から南に折れ、土堀の間をぬけると平場3と呼んだ細長い平場に出る。ここには列状の石の集まりや、建物の柱の下に敷く平石（礎石）がます目のように規則的に並ぶようすを地表面でもみられる。

この平場で具体的な規模がわかった建物跡は2つある。ひとつは軒を入口にみせるように建っていた柱間 4×5 間（東西約9.2m、南北約7.4m）の大きな建物である。礎石自体は平石を用いた簡単なもので、倒木により位置が動いたり、斜めになっているものもあるが、ほぼ一定間隔で碁盤の目のように並んでいる。その東側縁に石が列状に並び、一部に四角い石が配された入口と思われるところがある。この石列のなかから石製の掻き臼が拾えた。もうひとつは西側に並ぶもので、礎石の並びがはっきりしないところもあるが、倉庫などの小型施設と思われる。



第7図 入口部と平場3

発掘では、平場3は室町時代から戦国時代頃に造成された可能性が知られ、地表面にみえる建物跡は戦国時代前後のものと予想された。ここでは土鍋やすり鉢なども出土し、この建物が車廻のような



第8図 平場3の礎石建物跡

僧侶や行者が生活したところかもしれない。この建物を通り過ぎると平場3は徐々に狭くなり、緩やかにカーブして西側に回り込んでいく。この周辺は何もみつかっておらず、どのように使われたのかわからない。

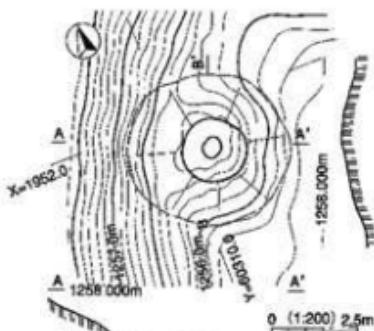
平場2（上段南側の広い平場）

平場3が西へカーブするあたりに緩やかに上段へ登る道があり、ここを登ると平場2に出る。平場2は隣の平場1より若干高く、広く平坦で見通しが良い。地表面で建物の礎石はみつからなかったが、白山への登り道、その脇に円形の土盛り（マウンド）、中央に道跡と思われる浅い窪地、その西側に後代の炭窯と思われる細長い窪地がある。白山へ登る道は平場の北端にあり、徐々に土手のように高くなって山の斜面にたどりつくようにできている。西へ直線的に向かう道で、実際登るとかなりしんどい。マウンドは直径5mほどの単独である円形の土盛りで、正体は不明である。

この平場2はどのような場所だったかよくわからない。ただ、地表面に建物の礎石がみられないことは土中に埋没したか、撤去されたと思われ、最後の時期には使われていない古い平場だったのかもしれない。



写真4 白山への道跡（裏より）



第9図 平場2のマウンド

平場 1（元寺場遺跡の中心部）

参拝の順からすると逆になるが、平場2を北に進んで一段下がると平場1に入る。ここは遺跡の中核部とみられ、一抱えもあるような石を基礎石に使った堂跡と長方形の建物基礎(基壇)が南北に並んでいる。

堂跡は周囲より一段高く四角に土盛りした上に礎石を置くもので、柱間は 5×5 間（東西約9.2m、南北約9.6m）とかなり大きい。地方での代表的な密教本堂は五間堂といわれ（1990「長野県史 美術建築資料編」）ており、この堂跡はまさにそれに該当する。礎石の配置も、これまでに知られている5間堂の柱配置に一致し、東側2間の内部柱がない部分が外陣と呼ばれる参拝する部分で、中央 2×3 間分の柱がない西側の3間が仏像の安置される内陣にあたる。この配置から堂跡の正面は東であったことがわかる。

北側の建物基壇は礎石が確認できなかったが、古い堂跡かもしれない。この建物基壇の西側には小さな庭地があり、その脇の倒木の根元から骨董に使われた鎌倉時代の占瀬戸瓶子と四耳壺が出土している。

第10図 元寺塚遺跡の全体

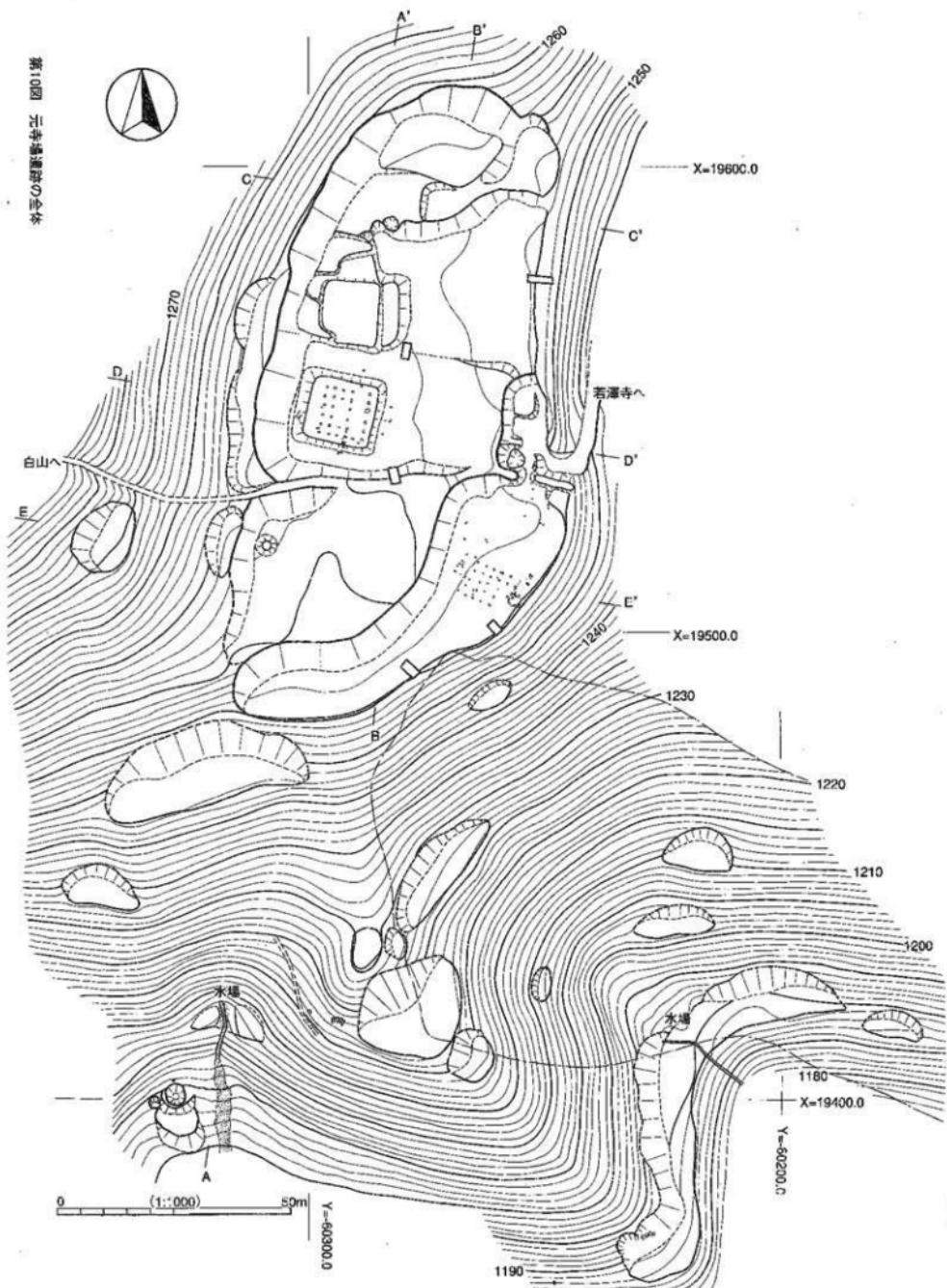
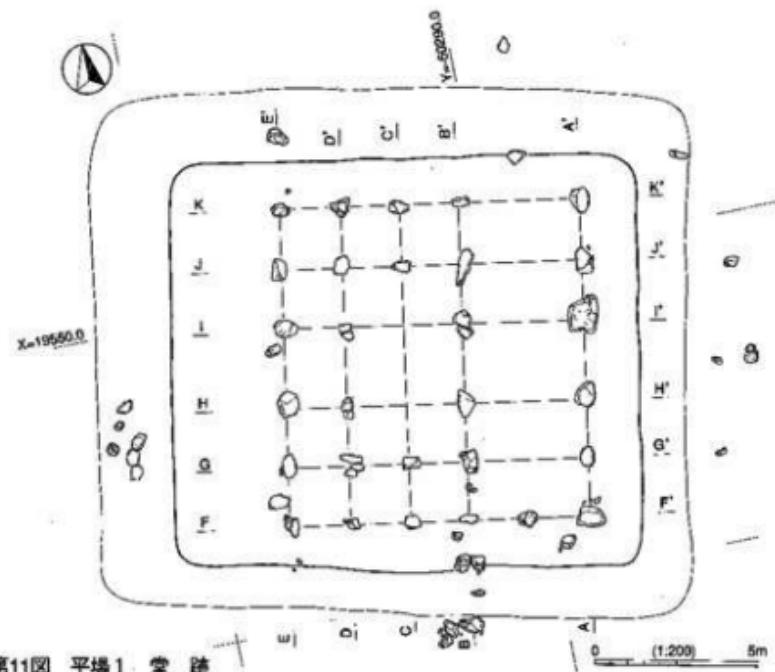




写真5 平場1の堂跡（北西より）

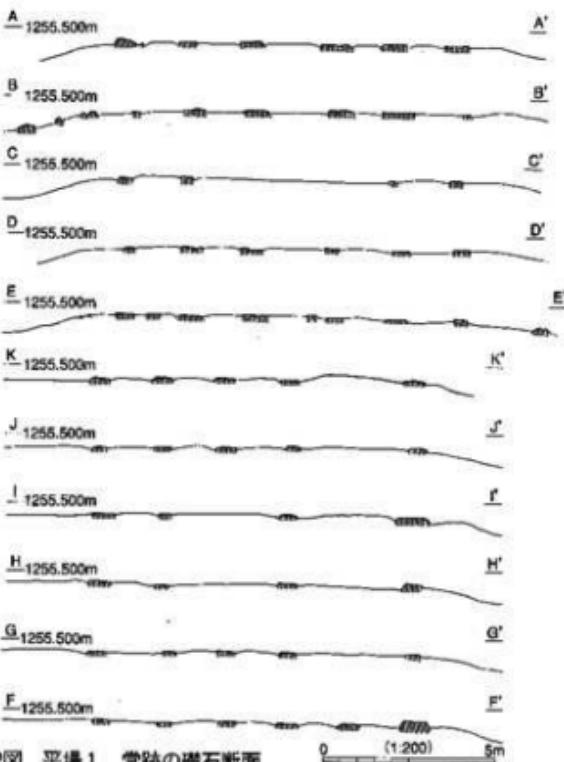


平場4（北端の狭い階段状平地）

平場1の北側の尾根斜面に緩やかに続いていくところに狭い平場がいくつか連続的に造られている。地表面では礎石が認められず、何に使われたかわからないが、平場2と同じように古い時期のものかもしれない。

水場とテラス群

遺跡南側から南東側下方の尾根筋と谷内に、小さなテラス状の平場が不規則にある。この周辺で炭焼きが行われたというので、多くはそれに関連すると思われるが、一部は寺の施設かもしれない。



第12図 平場1 堂跡の礎石断面

また、南と南東谷内には湧水のある水場がある。当時のままかはわからないが、南東の水場は大きな帯状テラスが造られ、南の水場はやや平坦な半円状の平場となっている。いずれも水量は少なく、流れ出た水も途中で地面に染み込んでいる。山岳寺院と水の信仰の関わりはよく知られているところで、寺院中心に湧水池を置く例がある。この遺跡の水場は境内外となるが、寺院をつくる適地が近くにないために離れていたか、あるいは元寺場遺跡内にもかつて水場があったのだろうか。

3 発掘調査のようす

(1) 発掘調査の概要

元寺場遺跡は直接関係する史料もなく、その存在もあまり広く知られていなかった。そうしたなかで今回は試し掘りの溝(トレンチ)を掘り、遺跡の造られ方や残り具合を調べることにした。トレンチを掘る場所は盛り土された部分(=斜面の下側)のほうが古いようすが残っていると考え、平場の縁周辺の5地点を選んだ。発掘したところはすでに埋め戻されているので発掘のようすを写真や図面で紹介する。

(2) 各発掘地点のようす

今回の試し掘りの溝(トレンチ)では地表面下にどんな地層があり、どの地層からどの時期の土器が出るかを注意してみた。これを知ることによって遺跡の増改築とその時期が知られると思った。

地層の概略

遺跡の地層は本来からある山の地層と、寺院が建立された以後の盛ら

- 古代土器
- 中世土器
- △ 金属製品・鉄津
- 石・石製品・炭化材
- ☆ 土製品

地層

石

炭を多く含む層

黒・暗褐色土層

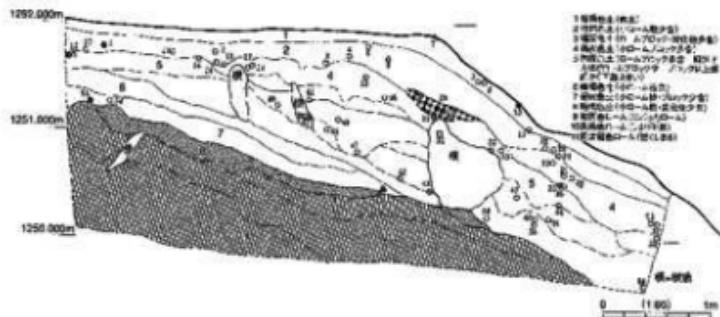
ローム層

第13図
トレンチ図凡例

れた地層に区別できる。山の地層は1・5トレンチで確認できたように下から堅いローム、柔らかいローム、腐植土の暗(黒)褐色土である。この山土の上に元寺場遺跡を造成した地層が載っているが、これらの地層はロームブロック(ローム土の塊)の含まれ方、土の色、炭粒や焼け土の有無で分けられる。このなかでロームブロックを多く含む地層は、山を削った土であり、盛土とみられる。一方、黒目の暗(黒)褐色の土は植物が腐ってできた土で、地表面周囲の土を用いたか、地表面であった時に植物が繁茂してできた可能性がある。また、炭粒や焼け土を多く含む地層もロームブロックを混じらないかぎり、周囲で火が焚れるなど地表面だったことを示すと思われる。これに加えて人工的な穴跡や置かれた石がみつかった地層も地表面とみられるが、発掘では木の根痕と思われる穴跡が多く、明確なものは把握できなかった。

遺物の出土

遺跡から出る土器・石器など持ち運べるもの遺物と呼んでいるが、遺物は時代ごとの特徴が独自に研究されており、出てきた地層の時代を知る手がかりになる。さらに考古学では古いものほど下の地層から出てくるという基本的な考えがあり、これらを考え併せて地層の年代を推測することができる。ただし、実際には平安時代と中世の土器が混じって



第14図 1トレンチの土層

出る場合が多く、中世に平安時代の遺跡を壊して盛土したり、中世の遺物が腐った木根跡に入り込んで下層にまぎれ込んだと考えられるものもある。

ここでは土器が一定量出土し、各地層から出た土器の年代相互に矛盾がない場合で、各地層の年代はその地層に含まれる最も

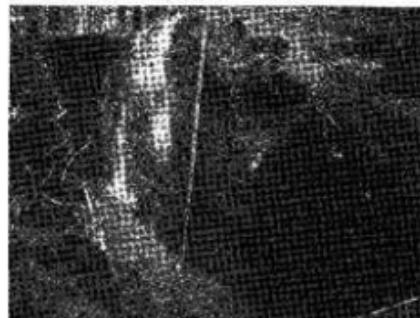


写真6 1トレンチ

新しい土器の年代よりも新しく、その地層より上の地層から出た最も新しい土器の年代より古いという時間幅のなかで考えることにした。

1. 平場1の調査

平場1のつくられ方を調べるために北東縁に設けたトレンチで、幅約1.6m、長さ5.6mの範囲を深さ最大2.3mほど掘り下げた。

土層のようす

最下部には緩やかに傾斜する山土のローム層と腐植上の暗褐色土があり、その上にはローム土塊やローム粒が多量に入る盛り土の地層が載る。このなかにローム粒がやや少ない暗褐色の地層（6層）が1枚挟まれ、一時的に地表面だったとも思われるが、断定はできなかった。そして、これらの盛土の上には部分的に炭の多く含まれる地層があり、その上を暗褐色土が全面に覆っている。

出土遺物と地層の関係

地表面近くの暗褐色土層からは戦国時代16世紀中ごろの瀬戸美濃地方の大窯^{おおかま}という窯で焼かれた丸のみ皿破片や室町時代頃の茶湯で使う火鉢

(風炉) が出土した。その下の盛り土内からは平安時代の土器破片が多く出土したが、5層下部からその下の6層以下は遺物が少ない。7層からは鎌倉時代頃と思われる青磁碗破片1点が出ているが、1点のみで腐った木根跡に紛れ込んだ可能性も残される。

1 トレンチのまとめ -----

暗褐色土6層で整地が一旦途切れる可能性が残るが、上の3~5層は一連の盛り土とみられ、その時期は平安時代(鎌倉時代)以後~室町時代とみられる。7層から出土した青磁碗小片1点が、7層に含まれるなら、盛土は鎌倉時代以後となるが、今回は断定できなかった。なお、盛土の3~5層中から綠釉陶器が数点出土している。

2 2トレンチ

平場1・2境に設定し、白山への道が何時できたのか、平場1と2の造られた時期に差があるかを調べることにした。幅2.0m、長さ3.8mの範囲を地表面から70cm前後のローム層上面まで全面的に掘り下げ、一部をさらに30cmほど掘り下げた。

1255.000m



第15図 2トレンチの土層

地層のようす

山土のローム層の上に、盛土の小ローム塊を含む褐色灰色土、炭粒を多く含む土層、ローム塊を含む盛土と思われる土層、焼け土や炭粒を少し含む土層が重なり、最上部に腐植土がある。堅く締まったローム層上面、炭粒や焼け土を含む2・6層下面は地表面だった可能性がある。ただし、2層は上部の1層共に石が混じることから地表面の土を集めた盛土かもしれない。いずれの盛土の地層も狭い範囲に分布し、平場全体の盛土ではなさそうだ。

遺物と地層の関係

1層で室町時代後半頃の古瀬戸皿や「洪武通宝」などの銅錢、2層で中世の素焼きの皿（カワラケ）が出ている。それより下の6層から8層上部までは平安時代の土器が出土し、8層上部付近に須恵器壺が集中していた。それ以下は遺物が出土していない。

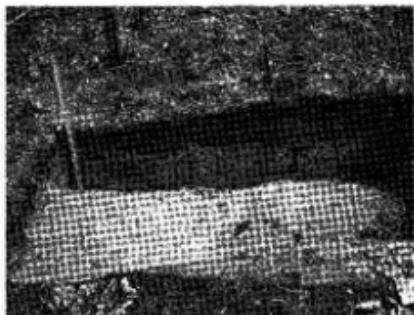


写真7 2トレンチ

2トレンチのまとめ

平地2は堅いローム層が確認できたことから尾根状の小高い地形を削って造成されたもので、平場1側に柔らかいローム層があることから元の地形の違いで平場1と分けて造られたようだ。白山への道は、堅いローム層上面から存在したかもしれないが、狭い範囲では竪穴住居跡の床面の可能性も否定できない。ここでは修繕・補修によるとみられる狭い盛土まで遡るとしか言えない。その時期は平安時代から室町時代の間となる。

平場3では4トレンチのみ掘る予定だったが、水場へ下りる道があるよう見つけられた場所があり、ここに3トレンチを追加した。幅1.6m長さ3.0mの範囲を深さ2m、部分的に2.6mまで掘り下げた。

地層のようす

最下層は傾斜の急なローム層で、その上にやや傾斜の緩やかにごったローム層、その上に焼け土や炭粒を含む14層、ロームブロックの少ない12・13層の褐灰色土、明らかな盛土の10・11層が重なる。その上の9層は山斜面の小規模な崩落によるかもしれないが、これらの10~13



写真8 3トレンチ

層を削るように急傾斜で分布し、地形が大きく変わらようすが見て取れた。その上に盛土の8・7層が続き、6層の炭粒を多く含む地層が重なる。その上は細かい盛土がいくつかあり、焼け土のある2層、表面の腐植土と続く。

遺物と地層の関係

14層以上で平安時代の土器が出土し、9層より上で室町時代(15世紀)以後の土器が含まれる。このことから9層下の10・11層は平安時代から室町時代の間とみられる。なお、釘は少量10層から出ているが、大部分は9~7層と2~5層から出土した。いずれも曲がっていたり、サイズもさまざままで鏽で木跡が残るものもある。6層では、土鍋(内耳鍋)が出土し、それより下の9~7層は内耳鍋より古く、出土した古瀬戸より新

元寺場遺跡の発掘調査



しいとみられるので15世紀中頃～16世紀前半の間、それより上層は16世紀となる。2層からは銅製の飾り金具、仏像、高熱で溶けてくつ付いた銅錢、炭になった穀類の塊や建具部品がまとまって出土した。

3トレンチのまとめ

14層で平安時代の土器が出たことから、少なくとも平安時代に大規模な盛土はなかったようだ。ところが平安時代から室町時代のある時期に10・11層盛土が始まり、15世紀中頃～16世紀前半の間に大きく盛土されて平場3の基本形ができたようだ。この盛土中にローム土塊が入ることから平場2の縁を削って盛ったとみられ、通路でつながる入口部もこの平場3の造成に併せて整備されたかもしれない。また、盛土中で釘が多く出土し、建築材が捨てられたか、建築材を捨てた場所の土が用いられたようだ。そして、平場3ができる以後は崩れやすい縁を補修したか6層以後に小規模な盛土が繰り返され、最後に近い2層で器材を焼く行為があったようだ。平場3は15世紀中頃～16世紀に整備され、少なくとも16世紀の中頃まで維持されたようだ。

4. 平場3

平場3の造られ方を調べるために設けた。幅2.2m長さ4.2mほどの長方形に深さ最大1.8mほど掘り下げた。

地層のようす

斜面上側は40cmほど、下側は1.4mまで掘り下げると柔らかいローム層が出るが、その上に炭混じりの2枚の地層と盛土が重なる。この盛土中にも焼け土や炭粒が混じる。

遺物と地層の関係

柔らかいローム層から縄文土器が僅かに出土したが、一般的にローム層で土器が出上ることはなく、このローム層が後代に雨水で流れて溜まったものか、土器自体が木根の穴でこの地層にまぎれ込んだものだろう。その上の炭はじり6層より上で平安時代の土器が出土し、3層から山茶碗

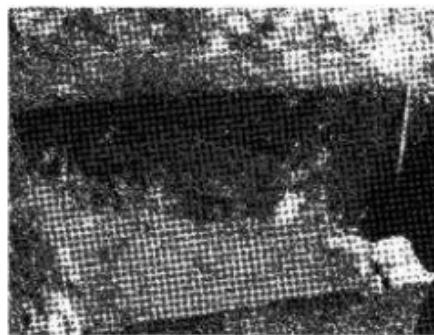


写真9 4トレンチ

と思われる破片が1点、2層上面～1層で戦国時代16世紀前後の土器が多く出土している。13～16世紀の間に盛土され、16世紀には平場が完成していたようだ。

4トレンチのまとめ

地層の特徴と順序から、4トレンチ4・6層が3トレンチ14層、2・3層の盛土は3トレンチ11～7層のいずれかと対応するようだ。平安時代には大規模な盛土がなかったこと、13～16世紀の間に盛土されたことは3トレンチの結果と似ている。この盛土中に室町時代の遺物が入らないことからすれば、室町時代以後の造成の可能性は高い。4トレンチの地層は同じ平場の3トレンチほど複雑ではないが、あまり頻繁に修復することがなかったことによるか。

5. 5号トレーンチ

調査の最後に、平場1の中央に僅かにある段差の原因を調べるために、幅60cm、長さ3.6mの範囲を掘り下げてみた。限られた時間のなかで地層をみることを優先し、あまり広い範囲は掘っていない。

地層のようす

地表面の1.2m下に山土のローム層と腐植土の暗褐色土層があり、その上にローム塊を多く含む7～5層の盛土、その上に炭粒をやや多めに含む4層暗褐色土が重なる。その上に再び盛土と思われる3層の褐灰色土層があり、再び2層の暗褐色土層、表土と続く。本来の山土を除くと4、2層は地表面だった疑いがある。なお、盛土5・6層は連続しながらも土のようすや遺物の出方に違いがある。

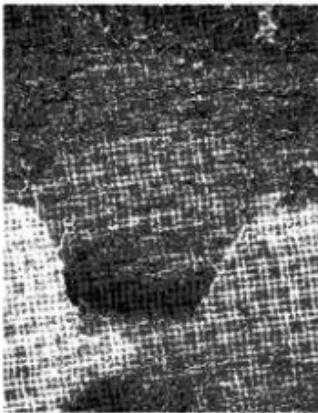
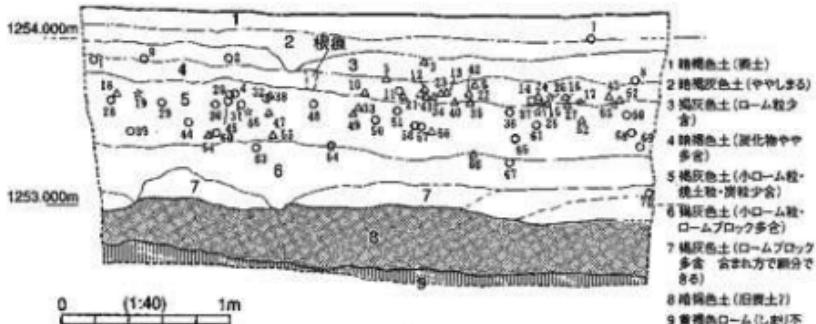


写真10 5号トレーンチ土層



第18図 5号トレーンチの土層

遺物と地層の関係

中世の土器ではなく、平安時代の土器のみが出た。それも盛土の6・7層からは少なく、大部分が5層からである。また、4・5層は製鉄作業で出るくず（鉄滓）やフイゴの口の破片、6層で鋳型？が出土した。

5 トレンチのまとめ

中央の僅かな段差は異なる時期の整地が重なったものではなかった。一方、平場1が最低2回整地されている可能性が知られ、堂跡はそのうち新しい盛土の時期のものかもしれない。また、製鉄・鋳銅関係の遺物が多く出土し、この周辺で寺院建立のための金属加工が行われたようだ。時期は残念ながら平安時代以後から、2回目の盛土以前としかわからなかつた。

6 トレンチのまとめ

1・3・5トレンチではそれぞれ2回整地された可能性が知られ、この遺跡は長い間に造り替えられているようだ。各整地の時期は明らかにしきれなかつたが、平安時代の整地については平場1の1トレンチで知られた古い盛土にその可能性が残されるものの、他に遡る確実な盛土はなく、平場3は室町時代～戦国時代頃に大きく造成されたもので、地表面に残る姿は戦国時代のものであることが知られた。

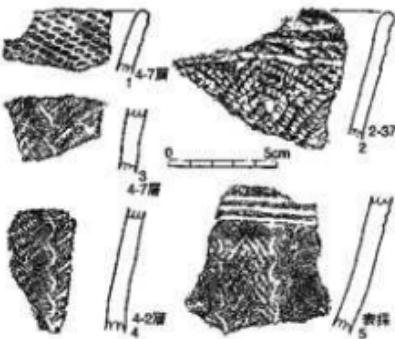
ところで、平場1で鎌倉時代の古瀬戸骨壺が出土しているが、このことは鎌倉時代に平場1の原型ができていたことを示すと思われる。平安時代に遡る確実な整地がないとすれば、1トレンチ7層から出土した青磁碗破片も平安末期～鎌倉時代に盛土されたことを示すともみられる。ただ、これを裏付けるには今回の調査でも資料が少なく、今後の課題として残される。

(3) 発掘でみつかった遺物

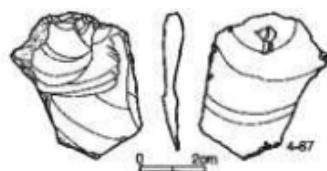
発掘で得られた遺物を寺院以前と寺院以後に大きく分け、それぞれ焼物、金属製品、石製品など材質ごとに紹介する。

① 寺院以前の遺物

遺跡全体で散財的に縄文土器が僅かにみつかっている。縄文時代早期の押型文土器(1)、土器のなかに植物繊維の入っている前期前半の土器(2)、中期初頭の土器(他)がある。石器は1点のみ縁に細かく打ち欠いた刃のつくチャート製石片がある。



第19図 縄文土器



第20図 石器

② 寺院時代の遺物

元寺場遺跡で寺院が建立、あるいは神仏に関わる宗教行為が行われたことが遺物から窺えるのは、平安時代からである。平安時代の遺物は前半から僅かにあるが、もっとも多いのは平安時代後半であり、これが確実な初源期といえそうである。その後、12・13世紀の遺物が僅かながら散在的にみられるが、南北朝期前後の遺物は現時点では認められず、室町時代から戦国時代にかけて再び遺物が増加している。このように遺物をみると、元寺場遺跡は長期にわたって利用されているが、利用の仕方や利用の程度は時代ごとに変化しているようだ。

A 焼物

焼物は年代の研究が進んでいる分野で、遺跡や遺構の時代を知るものさしに使われている。それは、材料の粘土がさまざまな形に造りやすく、焼きしめた後に別の形につくりかえにくくこと、石や金属に比べて壊れやすいことから使用時間が短いと考えられていることによる。

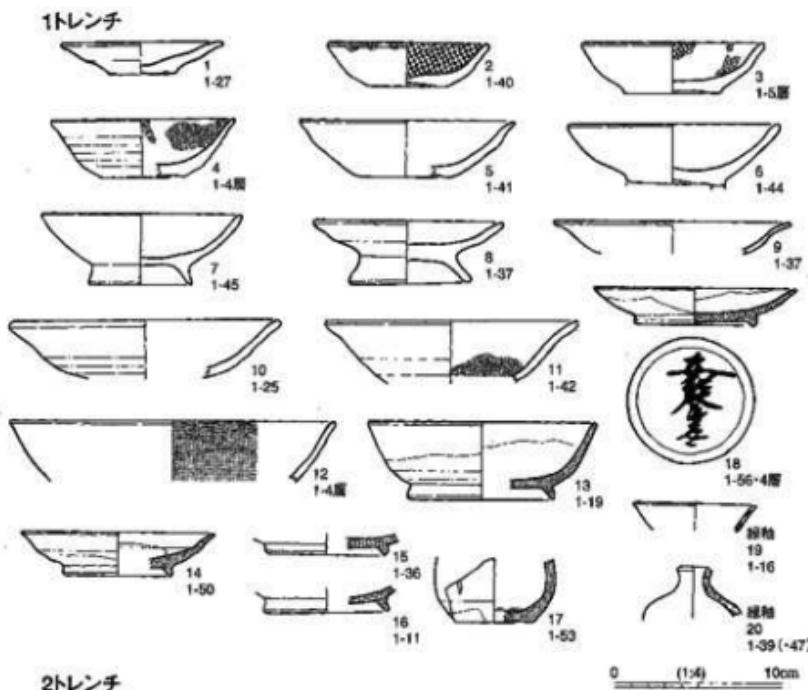
平安時代の土器

平安時代の土器は遺跡内のどこを掘っても出ており、量も多い。無台の小さな杯を中心に食器が多く出土し、灯明具に使われて煤がつくものも多い。平安時代に灯明具は仏前で用いられることが多いとされており、これらは注目される。この特徴は集落遺跡で出土する土器とは大きく違う点であり、これが寺院や信仰の行為に関連するとみられる。

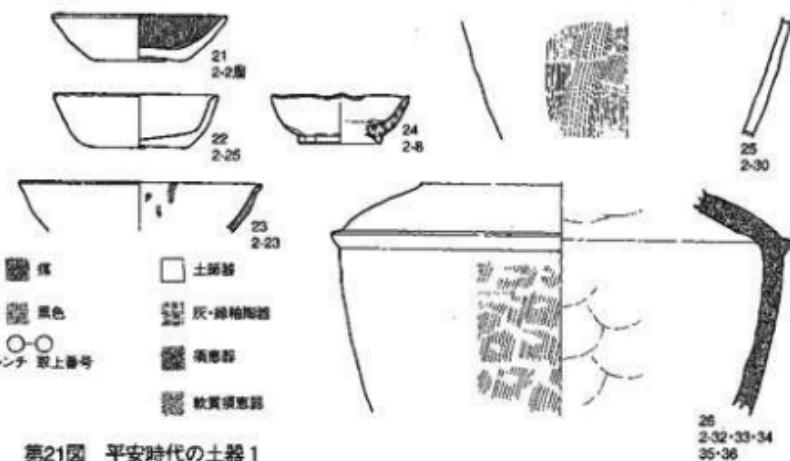
平安時代の土器には素焼きの土師器、内面に炭素を吸着させた黒色土器、燃し焼きの堅い青灰色の須恵器、やや燃し焼きが弱い軟質須恵器、木灰を釉にした灰釉陶器、銅を混ぜた鉛を釉とした綠釉陶器などがある。このなかで、灰釉・綠釉陶器は東海地方から持ち込まれたものである。

器の種類では食器が圧倒的に多く、特に無台の小杯の出土量はかなり多い。他に軟質須恵器や土師器の杯、灰釉陶器や土師器の椀、綠釉陶器・灰釉陶器の小碗、土師器の台のついた皿(盤)、灰釉陶器の皿などがある。珍しいものでは第21図の須恵器の鉄鉢型鉢とも思われる破片が1点ある。貯蔵具は少なく、須恵器の壺、灰釉陶器の壺・瓶、綠釉陶器と灰釉の小さな瓶(小瓶)が出ていている。なお、第20図の綠釉の小瓶は口の欠損部に漆が塗られていた。煮沸具は僅かで小型の甕、板で器面を整えた長い胴の甕、周間に鈎がついた羽釜が出ている。

なお、内側を硯につかった灰釉陶器皿がいくつかあり、この遺跡で文字を書く行為があったことを示す。そのうちの1点の底に、この場所を示す名前か「安養□」と墨で文字が書かれていた。

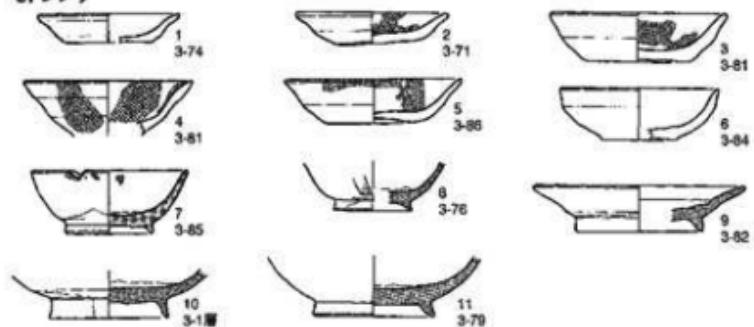


2トレンチ

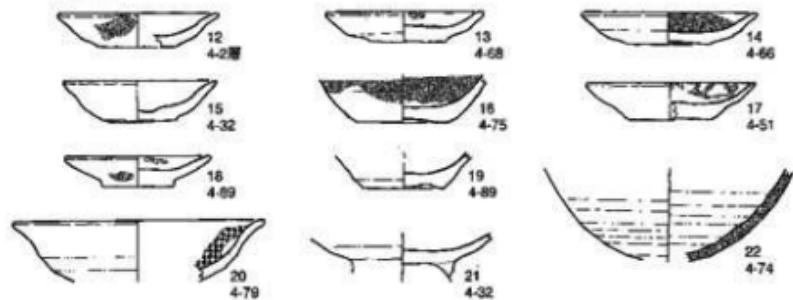


第21図 平安時代の土器 1

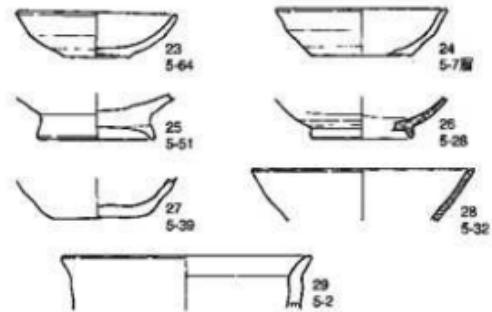
3トレンチ



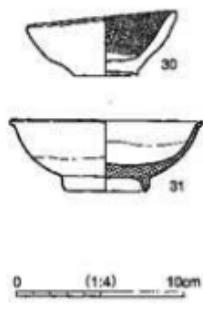
4トレンチ



5トレンチ



表探他



0 (1:4) 10cm

第22図 平安時代の土器 2



写真11 灰釉椀 (21図13)



写真12 灰釉小椀 (22図7)



写真13 灰釉小椀 (22図31)



写真14 土師器椀 (21図7)



写真15 上面 (観面)



写真16 灰釉皿 (21図18)



写真17 裏面 (墨書き)



写真18 土師器盤 (21図8)



写真19 緑釉陶器

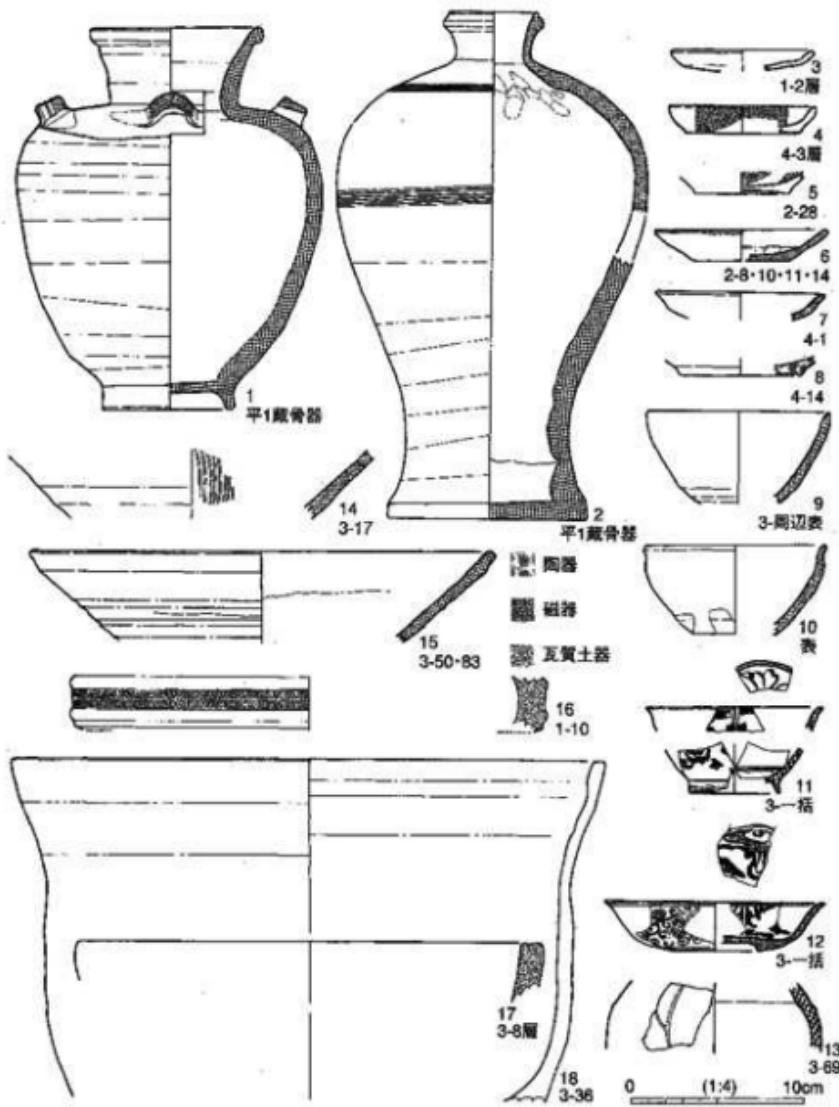


写真20 灯明皿に使われた土器

この平安時代の土器が寺の始まりを示すとみられるが、こまかい年代については問題がある。出土した土器で最も古いものは9世紀後半と考えうるものであるが、出土量が少なく、しかも特別な様子は見出しつくい。一方、圧倒的小型杯の出土に注目すれば、11世紀前後とみられる。ここでは後者の可能性が高いと考えておきたい。

中世の焼物

中世の焼物は少ないながらも種類が雑多なので掲載した図を中心に説明する。1・2は発掘前に平場1西脇の倒木根跡から出ていた骨壺である。いずれも鎌倉時代の古瀬戸と呼ばれる瀬戸地方を中心に焼かれた釉を施す焼物で、1は四耳壺、2が瓶子と呼ばれる壺である。1は欠けた部分を漆で接着している。3~5はカワラケと呼ばれる素焼きの皿で2は手づくね、4・5がロクロでつくられている。6・9・15が室町時代後半の古瀬戸で、6が縁釉小皿、9が抹茶を飲む天目茶碗、15が直縁の鉢である。図示していないが、他に茶壺と思われる破片がある。7・8・10・14が古瀬戸に統いて戦国時代に焼かれた大窯製品で、7が鉄釉の皿、8が灰釉の丸皿、10が天目茶碗、14がすり鉢である。11~13が中国産で、11・12が明の青花と呼ばれる染付皿と碗、13が青磁の花瓶と思われる破片である。このほかに内面に櫛目状の模様をつける平安時代末期の白磁碗、鎌倉時代の蓮の花を外面に削り出した青磁碗、室町時代後半頃の線の細かい蓮弁を外面に描く青磁碗の小破片、掲輪の壺破片がある。16・19が黒灰色の瓦質土器で、16は茶の湯を沸かす風炉と呼ばれる火鉢の破片、19も火鉢の類だろうか。18が近在で焼かれた土鍋で、一般的に内側に耳がつくことから内耳鍋と呼ばれる。この出土例は耳周辺を欠いている。



第23図 中世の焼物

この中世焼物の年代は概略二つの時期に分かれる。ひとつは手づくねカワラケや古瀬戸四耳壺・瓶子、蓮弁を削りだす青磁碗、白磁碗など平安時代末期から鎌倉のものである。骨壺を除けば、その出土量は少ない。もうひとつは室町時代後半～戦国時代で、このなかで古いものは14の直縁鉢で15世紀中頃も前半、新しいものは10の天目茶碗で16世紀中頃に近い前半である。なお、室町時代から戦国時代にはすり鉢や内耳鍋などが出土のように、ここで生活が営まれていたようだ。



写真21 内耳鍋

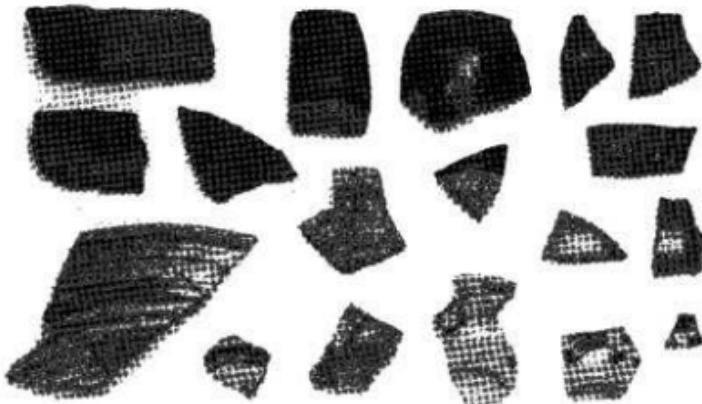


写真22 中世の焼物

B金属製品

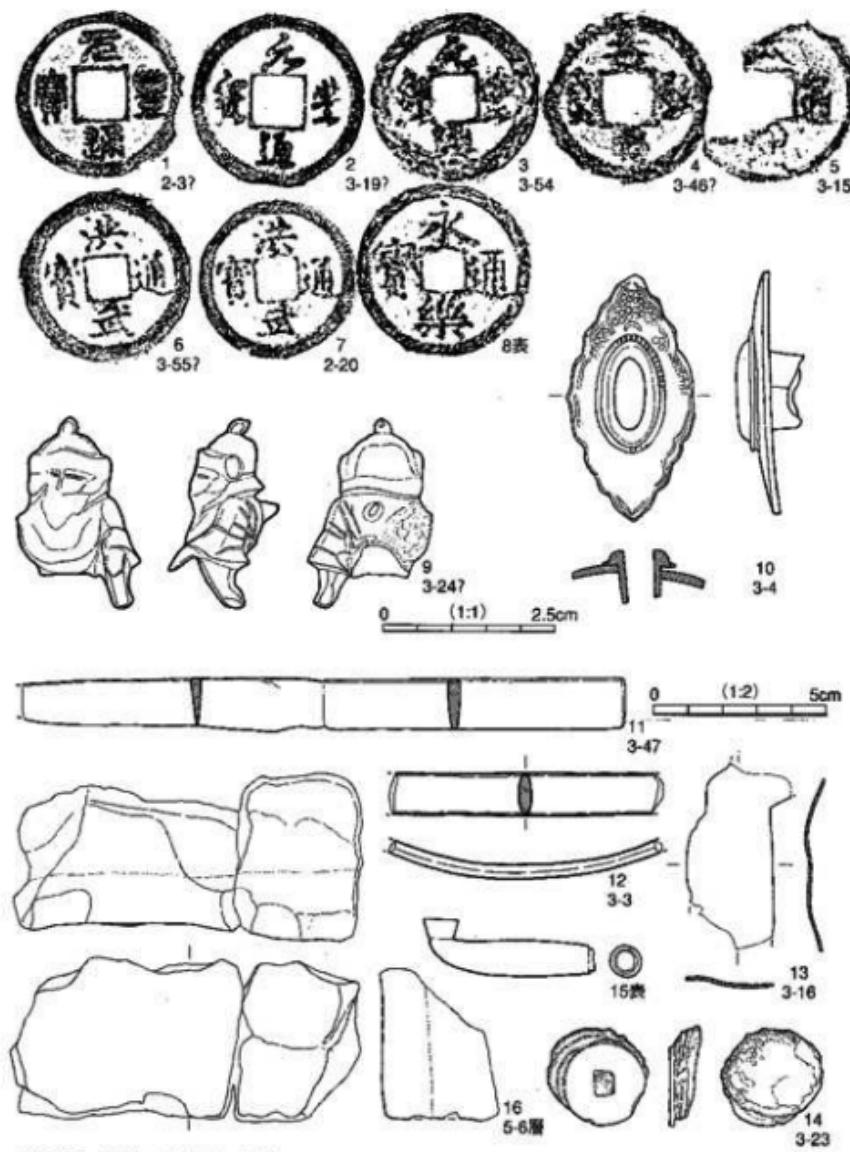
金属製品は鋳びたり、鑄なおされたりして必ずしもすべて遺跡に残っているとは限らないが、次のようなものがみつかっている。

銅製品

銅錢は十数点出土しているが、残りの良いものを図示した。1～3（4）が「元豊通宝」、5が不明、6・7が「洪武通宝」、8が「永樂通宝」である。すべて元は中国の錢であり、中世には中国錢やそれを日本で模倣した錢が一般に用いられた。9は小仏像で天部の毘沙門天だろうか。火を受けて顔と背中は荒れて胴下半は欠損する。同じところから出た14は銅錢が5枚重なったまま高熱で融着したものである。出土層からすると戦国時代と思われる。10は厨子などの扉金具、13も建具類の金具と思われる。11は小柄で柄が銅、刃が鉄製である。12は銅製の取っ手と思われるが、何の部品かよくわからない。15は南・南東の小テラス状の平場で拾われたキセルで、江戸時代のものだろう。これらの銅製品のなかで、銅錢とキセル以外はすべて3トレンチの上層から炭化した建具類とともに出土している。焼却か火災によるものだろうか。なお、大型品の鋳型と思われるものが5トレンチ6層から出土した。細かい植物片を混ぜた粘土で器面はほぼ垂直、緩やかなカーブを描く平面形につくられ、内面の表面は熱を受けて発泡して僅かに銅が残る。断面は内側が灰色で外側が黒灰色である。



写真23 銅製品



第24図 銅錢・銅製品・鋳型



写真24 鋳型？(上面)

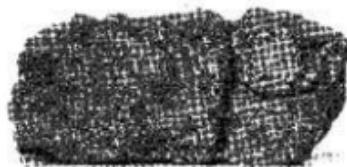


写真25 鋳型？(側面)

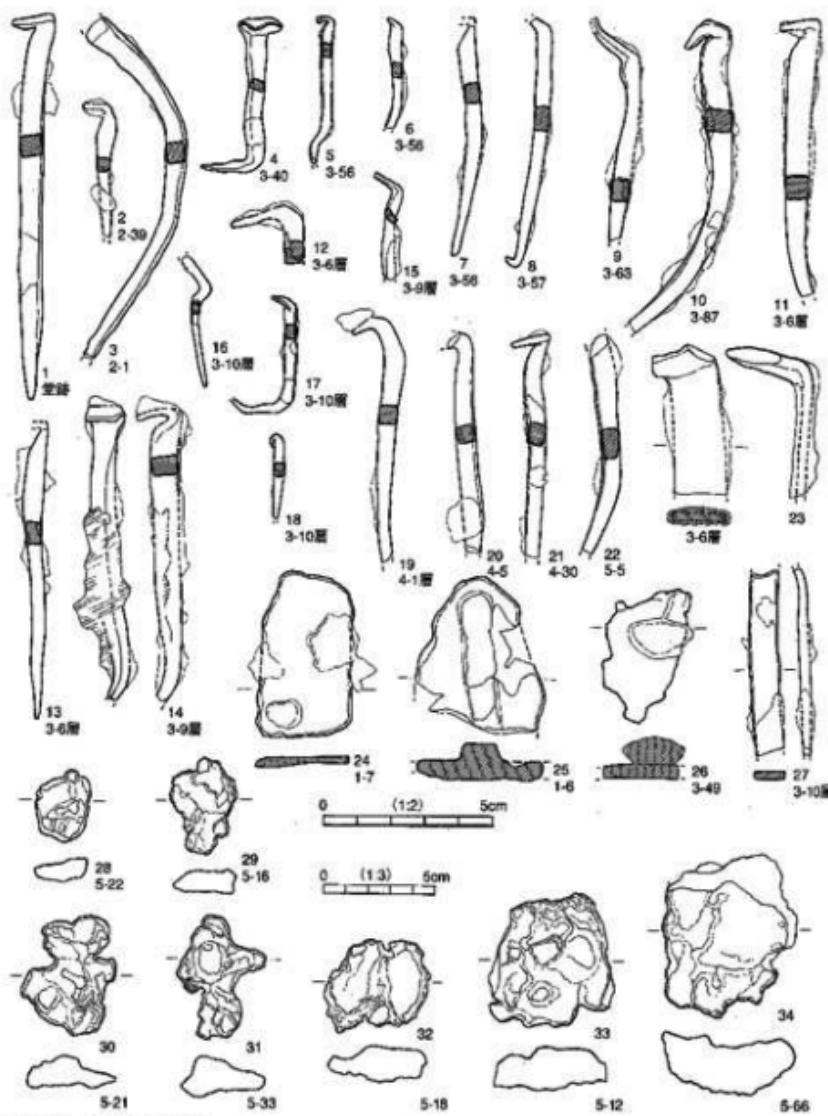
鉄製品

ほとんど釘で、他に直角に折れる長方形の板状製品(23・27)、鋳物の器(鍋)片(25・26)、鍛鉄の板状製品(24)がある。25の突起は鉄を流し込んだ湯口^{ゆち}と呼ばれる注ぎ口と思われる。釘は鍛造でつくられ、頭は平たく叩きのばして折るか、直接くの字に曲げている。サイズはさまざまで、建具類に使ったと思われる短いものから、建築材に使ったと思われる長大なものまである。これらの釘の大部分は3トレンチで出土した。なかには14のように鎧で木質部が残るものがあり、建築材と共に捨てられたが、建築材が腐って釘だけ残ったと思われる。折れ曲がった釘が多いことも使用されたことを示している。



写真26 さまざまな釘

このほかに製鉄の際に出る製鉄くず(鉄滓)が5トレンチから集中的に出土している。フイゴの風を送る土製筒先の羽口^{はぐち}の破片、鋳型と思われる土製品も出土しており、この周辺で鍛冶などが行われたようだ。寺院建立か建て替えに関わるものかもしれない。



第25図 鉄製品と鉄滓

C 石製品

砥石は4～6の3点あり、5が砂岩の他は頁岩製で、すべて仕上げ砥と思われる。7の頁岩製硯は欠損した縁のみ出土した。8は平場3の礎石建物脇の右列から出た掘き口で、穴の内面が磨れ、穀物などを加工したとみられる。他は発掘以前に拾われていたもので、9は五輪塔の空・風と呼ばれる部分で、断面形は梢円形となる。10は石鉢の一種と思われるが、何に使ったかよくわからない。正面に薪のような文様、両脇に輪が刻まれ、上には深い穴があって周囲が若干皿状にくぼむ。これらの大型品は安山岩製で室町時代後半以後のものと思われる。



写真27 五輪塔



写真28 石鉢？

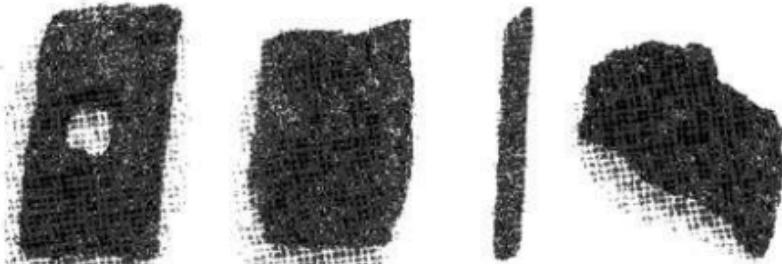
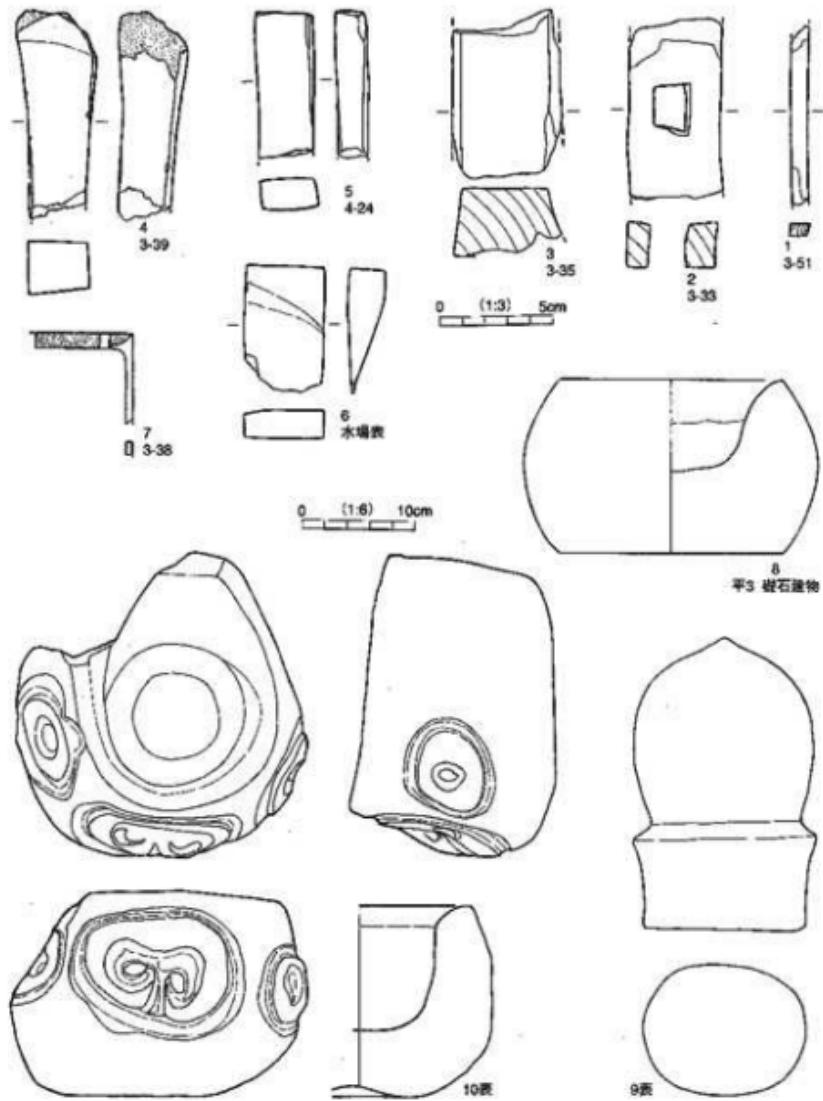


写真29 炭化した建具類と穀物



第26図 石製品と炭化材。

D その他

3トレンチの2層前後から火を受けて炭になったために腐らずに残った建具類の細かい材（1・2・3）が出ている。他に、調理した穀物が炭になった塊が出ている。（写真29の右端）

（4）発掘のまとめ

最後に、今回の発掘でわかったことをまとめておく。

＜遺跡の始まり＞

縄文時代にこの遺跡で何らかの活動があったと知られた。さまざまな時期の土器が少量出土し、傾斜が緩やかで湧水のあるこの遺跡地でのキャンプによるものだろう。ところで、波田町でここに最も近い縄文時代の集落遺跡は5kmほど離れた上海渡遺跡である。もちろん、時期は厳密に一致しないが、少なくとも縄文時代では集落から5km以上が行動範囲であり、この遺跡のような出先の仮居住地のような遺跡をつくりながら、山の植物や動物の採取を行っていたのだろう。

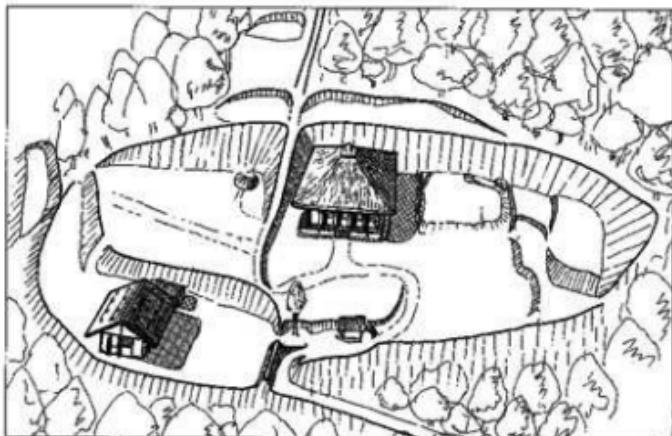
＜寺院の始まり＞

直接寺跡は確認できなかったが、遺物から堂跡が造られたか、宗教活動が行われたのは平安時代に遡る可能性が知られた。平安時代の土器は9世紀後半頃から認められるが、灯明具・皿を使った硯など寺院の存在を示すと考えた遺物は11世紀前後のものである。近年、全国各地の山岳寺院の調査で10世紀代～11世紀前後に整備されたものが多いと知られてきている。この遺跡もその年代に重なり、全国的な動向のなかで成立した寺院のひとつだったろう。9世紀後半の土器は量も少なく、このころには山中で単独に営まれる竪穴住居跡がみつかる例があることからすると、信仰に関わる活動をこの時期まで遡らせられると断定はできなかった。

<寺院の変化>

平安時代以後から鎌倉時代までの間に平場1の原型ができた可能性があるが、その造成の有無は断定しきれていない。しかし断片的に遺物があることは何らか活動は続いていたようだ。ところが南北朝期頃に一旦遺物が認められなくなつてようすがわからなくなるが、再び15世紀中ごろから遺物が増加し、この頃に入口部と共に平場3が整備され、併せて庫裏のような常駐施設ができたとみられた。

以上から、遺物の少なさは利用度の少なさを示すと単純にいえないが、少なくとも平安時代と室町後半～戦国時代には人が一定期間でも常駐する形があったようだ。また、伝承では室町時代に山麓の若澤寺ができるといわれているが、発掘からみるとこの時期に元寺場遺跡は存在していることが確認できた。つまり、「下りる」とは若澤寺の成立と元寺場遺跡が放棄される2時期のことがらを考えなければならないと思われる。いずれにしろ、室町時代には山麓の若澤寺—元寺場—白山山頂をつなぐ宗教施設とその宗教活動の体系化ができたが、16世紀後半以後はようすがわからなくなり、次第にこの遺跡も忘れられていったようだ。



第27図 戦国時代頃の元寺場遺跡の復元図

参考文献

- 1990 「長野県史 美術建築資料編」
- 1987 「波田町誌 歴史現代編」波田町誌編纂委員会
- 1989 原 明方「吉田川西遺跡における食器の変容」「中央自動車道長野
線埋蔵文化財発掘調査報告 3 吉田川西遺跡」
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 1990 小平和夫「第5節古代の土器」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘
調査報告 4 松本市内その1 総論編」
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 2001 鳥羽英雄「古代のあかり」「長野県考古学会誌96」

トレンチナンバー
採取遺物一覧

(時期—種類)

1 トレンチ

- 1 中—大竈丸のみ皿
- 2 平—須恵器臺
- 3 平—内黒焼か杯
- 4 平—須恵器甕
- 5 平—灰釉椀
- 6 鎔物鉄片
- 7 板状鉄片
- 8 平—灰釉皿
- 9 平—灰釉小瓶
- 10 中—瓦質火鉢
- 11 平—灰釉椀
- 12 中—青磁碗
- 13 平—須恵器甕
- 14 平—土師杯
- 15 平—土師杯
- 16 平—綠釉小椀
- 17 平—灰釉椀
- 18 平—土師盤?
- 19 平—土師杯・灰釉椀
- 20 平—土師盤
- 21 平—須恵器片
- 22 平—内黒焼か杯
- 23 平—須恵器甕
- 24 平—土師杯?
- 25 平—土師盤?
- 26 平—土師片
- 27 平—灰釉広口瓶
- 28 中—カワラケ
- 29 平—土師甕
- 30 平—土師甕
- 31 不明
- 32 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
- 33 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
- 34 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
- 35 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
- 36 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
- 37 繩文土器
- 38 平—灰釉椀
- 39 鉄釘
- 40 平—土師杯・灰釉皿
- 41 平—土師杯
- 42 平—土師盤
- 43 平—土師椀?
- 44 平—土師杯
- 45 平—土師椀
- 46 平—土師片
- 47 平—綠釉小瓶
(39に同じ)
- 48 平—土師片
- 49 平—灰釉椀・皿
- 50 平—灰釉縁皿
- 51 平—灰釉椀
- 52 平—綠釉椀
- 53 平—灰釉小瓶
- 54 平—鐵滓?
- 55 中—青磁碗
- 56 平—灰釉皿
- (転用硯・墨書き)

- 2 トレンチ
- 1 釘
 - 2 平—土師臺
 - 3 銅錢「元豐通宝」
 - 4 平—須恵器甕
 - 5 平—軟質須恵器
 - 6 中—古瀬戸天目茶碗
 - 7 平—土師片
 - 8 中—古瀬戸綠釉小皿
(10・11・14接合)
 - 9 平—灰釉椀
 - 10 中—古瀬戸綠釉小皿
(8・11・14接合)
 - 11 中—古瀬戸綠釉小皿
(8・10・14接合)
 - 12 平—灰釉椀
 - 13 平—灰釉椀
 - 14 中—古瀬戸綠釉小皿
(8・10・11接合)

- 3 トレンチ
- 1 中—カワラケ
 - 2 平—土師小型甕
 - 3 銅製品
 - 4 銅製飾り金具?
 - 5 釘・平—土師杯
 - 6 釘・平—土師杯
 - 7 石
 - 8 中—カワラケ
 - 9 中—古瀬戸茶臺
 - 10 中—大竈皿
 - 15 鉄釘
 - 16 平—内黒片
 - 17 平—土師片(位置不明)
 - 18 平—土師片
 - 19 銅錢
 - 20 銅錢
 - 21 平—土師杯
 - 22 平—灰釉椀
 - 23 平—灰釉皿
 - 24 平—灰釉皿
 - 25 平—土師片
 - 26 平—土師片
 - 27 平—灰釉広口瓶
 - 28 中—カワラケ
 - 29 平—土師甕
 - 30 平—土師甕
 - 31 不明
 - 32 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
 - 33 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
 - 34 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
 - 35 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
 - 36 平—須恵器四耳臺
(32~36同)
 - 37 繩文土器
 - 38 平—灰釉椀
 - 39 鉄釘

11鉄釘	53中—古瀬戸茶壺	4 トレンチ
12石	54銅錢	
13銅錢	55銅錢	1 中—大窓皿
14中—古瀬戸茶壺	56鉄釘 (複数)	2 中—内耳鍋
15銅錢	57鉄釘	3 平—土師杯
16銅製板	58鉄釘	4 平—土師杯
17中—大窓すり鉢	59鉄釘	5 鉄釘
18砥石	60鉄釘	6 中—内耳鍋
19銅錢	61鉄釘	7 中—内耳鍋
20鉄釘	62鉄釘	8 平—軟質須恵杯
21鉄滓	63鉄釘	9 平—土師杯
22石	64鉄釘	10 平—土師片
23銅錢 (5枚融着)	65鉄釘	11 平—土師杯
24銅製品 (小仏像)	66鉄釘	12 平—土師片
25中—内耳鍋	67中—古瀬戸小片	13 平—土師片
26鉄釘	68平—軟質須恵杯	14 中—古瀬戸 ? 片
27鉄釘	69中—青磁瓶	15 平—土師片
28中—内耳鍋	70平—灰釉椀	16 中—内耳鍋
29中—カワラケ	71平—土師杯	17 中—カワラケ
30鉄釘	72平—土師杯	18 平—土師杯
31炭化材	73平—土師杯 ? 他	19 平—土師杯 ?
32炭化材	74平—土師杯	20 平—土師杯
33炭化材	内黒楕か杯	21 平—土師片
34中—内耳鍋	75平—土師片	22 鉄釘
35炭化材	76平—灰釉小瓶	23 平—土師片
36中—内耳鍋	77平—土師片	24 砥石
37鉄滓	78中—内耳鍋	25 平—土師杯 ?
38硯	79平—灰釉椀	26 中—内耳鍋
39砥石	80平—土師片	27 平—土師片
40鉄釘	81平—土師杯	28 平—土師杯
41銅錢	82平—土師杯	29 平—土師片
42鉄釘	83中—古瀬戸直線鉢 (50接合)	30 鉄釘
43中—青花皿	84平—土師杯	31 不明
44中—内耳鍋	85平—灰釉小瓶	32 平—土師杯・椀 ?
45中—常滑甌	86平—土師杯	33 平—土師杯
46銅錢	87鉄釘	34 平—土師杯 ?
47小柄	88鉄釘	35 平—土師杯
48中—古瀬戸天目茶碗	89鉄釘	36 中—山茶碗
49誂物鉄	90不明	37 平—土師杯
50中—古瀬戸直線鉢 (83接合)	91平—灰釉椀	38 平—土師杯
51炭化材	92平—土師杯	39 平—土師杯
52中—青磁椀	93平—土師杯	40 平—土師杯 ?
		41 平—土師杯

- | | | |
|-----------|-----------|------------|
| 42不明 | 85不明 | 34フイゴ羽口 |
| 43平—土師杯 | 86平—土師椀 | 35鉄滓 |
| 44平—土師片 | 87平—土師杯 | 36平—土師椀? |
| 45平—土師杯 | 88平—土師椀 | 37フイゴ羽口 |
| 46平—土師杯 | 89平—土師杯 | 38鉄釘 |
| 47平—不明 | 90平—土師壺? | 39平—土師片 |
| 48銅錢 | 91中—内耳鏡 | 40鉄滓 |
| 49平—土師杯 | 5 トレンチ | 41鉄釘 |
| 50平—土師杯 | 1 平—灰釉壺 | 42鉄釘・平—土師片 |
| 51平—土師杯 | 2 平—土師小型壺 | 43鉄滓 |
| 52不明 | 3 鉄釘 | 44平—灰釉片 |
| 53平—須恵器杯? | 4 平—須恵器壺 | 45平—綠釉片 |
| 54平—土師杯 | 5 鉄釘 | 46フイゴ羽口 |
| 55平—土師杯? | 6 鉄釘 | 47鉄滓 |
| 56平—土師杯 | 7 平—土師椀? | 48平—土師杯 |
| 57平—土師杯 | 8 平—土師杯 | 49平—土師椀 |
| 58平—土師片 | 9 平—灰釉椀 | 50平—須恵器壺 |
| 59平—土師杯? | 10鉄釘 | 51平—土師椀? |
| 60平—土師椀 | 11平—灰釉椀? | 52鉄滓 |
| 61平—土師杯? | 12鉄滓 | 53フイゴ羽口 |
| 62平—土師杯? | 13鉄滓 | 54鉄滓 |
| 63平—土師杯 | 14石 | 55鉄釘・灰釉椀 |
| 64平—土師杯 | 15平—土師杯 | 56鉄製品? |
| 65平—土師片 | 16鉄滓 | 57平—灰釉椀? |
| 66平—土師杯 | 17フイゴ羽口 | 58平—土師杯 |
| 67縄文石器 | 18鉄滓 | 59平—内黒椀 |
| 68平—土師杯 | 19フイゴ羽口 | 60平—土師椀? |
| 69平—土師椀 | 20平—土師椀 | 61平—灰釉壺 |
| 70平—土師片 | 21鉄滓 | 62鉄釘 |
| 71平—須恵器壺 | 22鉄滓 | 63平—土師杯 |
| 72平—土師片 | 23鉄釘 | 64平—土師杯 |
| 73平—土師片 | 24鉄釘 | 65平—土師椀? |
| 74平—須恵器鉢 | 25フイゴ羽口 | 66鉄滓 |
| 75平—土師杯 | 26フイゴ羽口 | 67平—土師杯 |
| 76平—土師椀 | 27鉄滓 | 68平—土師壺 |
| 77平—灰釉椀 | 28平—灰釉椀 | 69平—須恵器杯? |
| 78石 | 29平—土師杯 | 70平—須恵器壺 |
| 79平—土師杯 | 30平—土師壺 | |
| 80平—土師杯 | 31平—土師杯 | |
| 81平—土師杯 | 32平—軟質須恵杯 | |
| 82平—土師椀 | 33鉄滓 | |
| 83平—土師杯 | | |
| 84平—土師杯 | | |

波田町 元寺場跡・若澤寺跡と その周辺の有用植物

横内 文人・松田 行雄

1. はじめに

私たちは、波田町の元寺場跡（標高1250m）・若澤寺跡（標高820m）とその周辺の植物を観察する機会を得た。

本調査の目的は、元寺場・若澤寺の信仰盛んなりし頃の住人たちが、利用したと考えられる有用植物を探ることである。当時の僧侶らが、毎日の生活にはたしてどんな植物を利用していたかを推測することは、誠に興味深い。しかし、当時の日々の生活に利用した植物を探ることは、容易ではない。文献での記録があれば、好都合であるが、それもない。現在の生活から考えることが大切と考えた。まず4回の現地調査を実施した。その結果、413種類の植物を記録することができた。さらに手元の文献により、その利用方法を調べてみた。

両調査地ともに、現在は自然林がほとんどなく、大部分が植林地である。カラマツ、ヒノキ、スギ、アカマツ等の針葉樹林を形成している。針葉樹類は、やに分が多いので林床の植物を貧化させる。一部に自然生のカツラやサワグルミが生育している。したがって、元寺場・若澤寺信仰の隆盛のころの全山が自然林より形成されていた頃よりは、植物数は大幅に減少していると思われる。

調査に当たっては、波田町在住の田中昭三氏・波多腰忠行氏が同行された。記して感謝します。

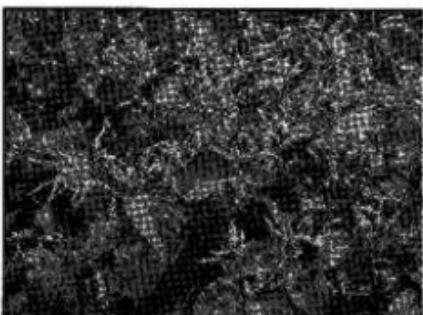
2. 調査日

- 2000年9月7日 元寺場跡 横内文人
2000年10月31日 若澤寺跡 松田行雄・横内文人
2001年6月22日 若澤寺跡 松田行雄
2001年7月23日 元寺場跡 横内文人

3. 元寺場跡・若澤寺跡の植物目録と利用方法（※印=帰化植物）

あ 行

アオイスミレ、アオダモ（用材、樹皮—薬用・繩・糞）、アオハダ（用材、葉—救荒・茶）、アカソ（茎—繊維、若葉—救荒用）、アカネ（根—染料、薬用）、アカバナ、アカマツ（幹—用材・薪炭材、松明・門松、松根油）、アキノキリンソウ（薬用、救荒用）、アクシバ、アケビ（果実—食用、イタドリ蔓—薬用・細工物・炭俵、若葉—食用）、アケボノスマミレ、アサノハカエデ（用材、樹液より砂糖）、アズマヤマアザミ（若葉—食用）、アズマヤマアザミ×アザミsp.（若葉—食用）、アブラガヤ、アブラチャン（材一小器具、果実—油で顛髪・灯用、生け垣）、アマチャヅル（若葉—食用・お茶）、アマドコロ（根茎—薬用・救荒用）、イカリソウ（茎葉—薬用、觀賞用）、イケマ（薬用）、イタドリ（茎—食用、葉—薬用・煙草代用）、イチヤクソウ（薬用）、イトスゲ、イナカギク、イヌガンソク、イヌシダ、イヌツゲ（生け垣、枝—まぶし、用材—ツゲの代用、皮—とりもち）、イヌトウバナ、イヌブナ（用材）、イヌヨモギ、イヌワラビ、イノコヅチ、イノモトソウ、イブキヌカボ、イボタノキ（枝—楊枝・器具の柄、虫白蝶、台木）、イワガラミ（若葉—食



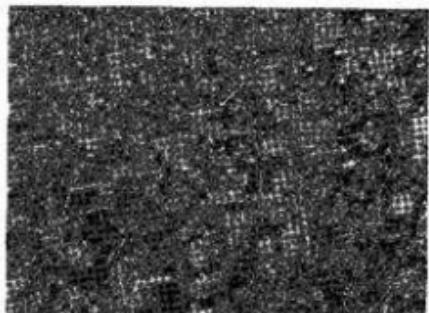


ウワミズザクラ

ウバユリ（救荒用、民間薬、澱粉）、ウマノミツバ、ウメガサソウ、ウラジロイチゴ、ウラジロノキ（用材、庭木）、ウリカエデ（樹液—抄紙糊、用材—経木・箸）、ウリノキ、ウリハダカエデ（用材、皮—編み物・縄、タンニン）、ウワミズザクラ（用材、樹皮—桜皮細工、果実—塩漬け）、エイサンスマレ、エゾノギシギシ、エゾノタチカタバミ、エゾハタザオ、エンレイソウ（根茎—薬用、熟果を食用）、オオカメノキ（材—弓・染を束ねる・輪かんじき、果実—食用）、オオガンクビソウ、オオバギボウシ（観賞用、若葉—食用）、オオバコ（若葉—食用、薬用）、オオバショウマ、オオミゾソバ、オオモミジ（用材—装飾・家具、庭木、盆栽）、オオバノヤエムグラ、オカラノオ、オギ、オククルマムグラ、オクノカンスゲ、オクノモミジハグマ、オシダ（根茎—有毒で条虫駆除剤）、オシャグジデンダ、オトギリソウ（薬用）、オトコエシ（食用、薬用）、オトヨウゾメ、オドリコソウ、オニイタヤ、オニグルミ（核肉—食用・油、材—家具・鏡台、樹皮—染料・駆虫剤）、オノエヤナギ（小細工物）、オヤマボクチ（食用）、オオランダガラシ（食用）

か 行

カキドオシ（薬用）、カサスゲ（葉—笠・蓑・敷物）、カツラ（用材—家具・彫刻・くり物・下駄・楽器・櫛、樹皮—屋根、タンニン、生け花、葉—抹香）、カニコウモリ、カノツメソウ、ガマズミ（果実—食用・染料、新芽—救荒用、用材—器具の柄）、カラハナソウ（食用、薬用）、カリヤス（葉の煎じ汁—民



カキドオシ

イグサの代用、庭木、挿し花)、キンミズヒキ (薬用)、ギンリョウソウ、涼クサイ、クサギ (若葉一食用、根一薬用、果汁一染料)、クサソテツ (食用)、クサヨシ (飼料、パルプ、編み物)、クジャクシダ (茎葉一観賞用、玉簪、薬用)、※クジラグサ、クズ (葛布、薬用、根一澱粉)、クマイチゴ (果実一食用)、クマシテ (用材、薪炭材、シイタケ台木)、クマノミズキ (用材)、クマワラビ、クモキリソウ、クリ (果実一食用)、クリンソウ (観賞用、有毒)、クルマバソウ、クルマバナ、クルマムグラ、クロイチゴ (果実一食用)、※クロバナエンジュ、クワ? (orヤマグワ) (養蚕、果実一食用、樹皮一織物、繩、用材一裝飾材、指し用、枝一雪ぐつ、葉一救荒用・飲料、根皮一薬用)、ケチヂミザサ、ケバイカウツギ (庭木、挿し花)、ケバノオオバコ (薬用)、ケヤキ (幹・枝一建築材・機器・車・家具・彫刻・平器・下駄の歯・燃料、陶器用の炭、そだ、樹皮一細工物)、ケヤマハンノキ (用材一硬殻、果実と皮一染料・柔皮)、ゲンノショウコ (薬用)、コガシワ、コカンスゲ、コクサギ (有毒、しらみの駆除剤)、コシアブラ (用材一箸・経木・下駄・小楊枝、若葉一食用、樹脂一塗料)、コシオガマ、ゴトウヅル (若葉一救荒用)、コナラ (果



キブシ

実—食用、用材、そだ、薪炭、澱粉、タンニン、野蚕飼育)、コハウチワカエデ(庭木、用材)、コバノイチヤクソウ、コバノイラクサ、コバノガマズミ(果実—食用)、コブシ(庭木、接台、花・葉—香油及び薬用、用材—床柱・鉛筆・工芸)、コボタンヅル、ゴマナ、コマユミ、コリヤナギ(枝—行李・椅子・かご・庭木、樹皮—紙)、コンロンソウ

き 行

サカゲイノデ、ササユリ(食用、挿し花)、ザゼンソウ(有毒)、サトメシダ、サラシナショウマ(薬用)、サルナシ(果実—食用、蔓を炭俵・幹—茶びん敷き、茎汁—飲料)、サルマメ、サワギク、サワグルミ(用材—家具等、樹皮—屋根・染料・薬用)、サワシバ(用材—薪炭)、サワフタギ(材—彫刻、木の灰—媒染剤)、サワラ(用材—桶類・繩工物、庭木、精油)、サンカクヅル、サンショウ(用材—すりこぎ、果実—香辛料・駆虫剤、若葉—香味料)、シオデ(若葉—食用)、シ

シウド、シシガシラ(観賞用)、シナノキ(用材、枝の繊維—織物・縄・紙)、シナノザサ、シハイスマリ、シャクジヨウソウ、ジュウモンジシダ(観賞用)、シュンラン(観賞用、根—薬用、花—塩漬けし茶)、シラカンバ(用材—硬穢・家具・くり物・建築)、シラコスゲ、シラスゲ?、シラネセンキュウ(薬用)、シラネワラビ、シラヤマギク、ツシロツメクサ(牧草、綠肥、芝生)、シロバナエンレイソウ、ジンヨウイチヤクソウ、スギナ(ツクシ—実茎を食用、薬用)、ススキ(バルブ、炭俵、かや屋根、帯、簾、飼料、穂—充填剤、根—利尿薬、観賞用、生花)、スズメノカタビラ、スノキ、セキヤノアキチョウジ、セリモドキ、センポンヤリ、ゼンマイ(若い葉柄—食用、根茎—薬用)、ソバナ(救荒用、薬用)、ソヨゴ(染料、とりもち、用材—細工、枝—新年飾り・祭事)



サンショウ

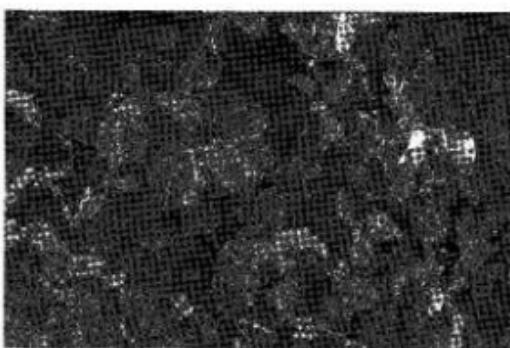
た 行

ダイコンソウ（薬用）、タガネソウ（観賞用）、タケニグサ（有毒）、タチツボスミレ、タチドコロ、タチマンネンスギ、タツノヒゲ、タデノウミコンロンソウ、タニタデ、タニミツバ、タマアジサイ（葉一たばこの代用）、タマガワホトトギス、タラノキ（新芽—食用）、ダン



タチツボスミレ

コウバイ（庭木、材枝—小細工・精油・薬用、種子—灯油・精油・薬用）、タンナサワフタギ、チゴユリ（観賞用）、チャルメルソウ、ツガ（用材、タンニン、生け垣、お盆）、ツクバネソウ（民間薬）、ツタウルシ（有毒液、染料）、ツルマサキ、ツノハシバミ（果実—食用、材は洋傘の柄）、ツヤナシイノデ、ツユクサ（民間利尿薬、救荒用、飼料、花汁—染料）、ツリバナ（材—弓・洋杖・印）、ツリフネソウ、ツルアジサイ（若葉—救荒用）、ツルウメモドキ（挿し花、縄及び糸）、ツルシキミ、ツルタデ（orツルソバ）、ツルニンジン（薬用、食用）、ツルマメ、ツルリンドウ（薬用）、テキリスゲ、トチノキ（用材、果実—食用、樹皮—タンニン）、トチバニンジン、トラノオシダ



ツルウメモドキ

な 行

ナギナタコウジュ、ナツヅタ
(茎の汁—甘味料、盆栽)、ナツ
ハゼ、ナライシダ、ナルコユリ
(民間薬、救荒)、ナワシロイチ
ゴ (薬用、食用)、ナンキンナナ
カマド (庭木、挿し花)、ナンバ
ンハコベ、ナンブアザミ (食用)、
ニガイチゴ (果実—食用)、ニガ ノブドウ



ナ、ニシキウツギ、※ニセアカシア (薪炭材、並木)、ニワトコ (鼈・材—
細工物、花—葉用、新芽—食用)、ヌカボシソウ、ヌスピトハギ、ネコノメ
ソウ、ネジキ (葉—有毒、薪炭、炭—漆器磨出)、ノアザミ (新芽—食用)、
ノイバラ、ノコンギク (救荒用)、ノガリヤス (堆肥、飼料)、ノカンゾウ
(若葉、花—食用、薬用、観賞用)、ノハラアザミ (新芽—食用)、ノブキ
(新芽—食用)、ノブドウ (民間薬)、ノリウツギ (庭木、用材—小細工・木
釘、根—糊料)

は 行

ハイイヌガヤ (種子—食用)、ハウチワカエ
デ (庭木、盆栽)、ハエドクソウ (有毒)、
ハクウンボク (庭木、用材—サクラの代用)、
ハクモウイノデ、ハシバミ、バッコヤナギ
(用材—箱・小細工、タンニン)、ハナイカ
ダ (新芽—食用)、ハナニガナ、ハネガヤ、
ハリギリ (新芽—食用、樹皮—薬用、家具、
枕木、下駄)、ハルトラノオ (薬用)、ハン
ゴンソウ (新芽—食用)、ハンショウヅル、
ヒカゲスケ、ヒツツバカエデ (用材)、ヒト
ツボクロ、ヒトリシズカ、ヒナスマレ、ヒ

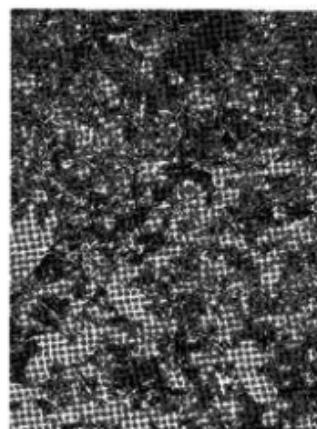


フキ

ノキ（用材—絹木、樹皮—屋根・縄、庭木・生け垣）、※ヒメウコギ（生け垣、若葉—食用、樹皮—薬用）、ヒメカンスゲ、ヒメキンミズヒキ、ヒメグアルミ（果実—食用）、ヒメザゼンソウ、※ヒメジョオン（救荒用）、ヒメシラスゲ、※ヒメムカシヨモギ、ヒメノガリヤス（飼料）、ヒメマイヅルソウ、ヒヨドリバナ、※ヒレハリソウ（飼料、食用）、フキ（花・葉—食用）、フクオウソウ、フクジュソウ（観賞用、有毒、薬用）、フサザクラ（庭木、用材、薪炭、皮—とりもち）、フジ（庭木・盆栽、救荒用、蔓—縄・紙・織物）、フシグロセンノウ、フタリシズカ、ブナ（用材—器具・家具、樹皮—染料、木タール、種子—油）、ヘクソカズラ（薬用）、ベニバナイチヤクソウ、ヘビノネゴザ、ホウチャクソウ、ホオノキ（用材—家具・彫刻・細工、下駄の歯、樹皮と果実—薬用、葉—お皿・餅等を包む）、ホソイノデ、ホソバノトウゲシバ（観賞用）、ホソバヒカゲスゲ、ボタンヅル、ホツツジ（有毒）

ま 行

マイヅルソウ、マキノスマレ、マダケ（若い茎—食用、竹の皮—包み物用、用材）、マタタビ（虫えいの果実—薬用、幼果の塩漬け—辛味料）、マツブサ（蔓を浴湯用、果実—飲料）、マムシグサ、マユミ（用材、皮—薬用）、マルバアオダモ（庭木、小細工）、マルバカエデ、マンサク（枝—しばり物、葉—収斂剤、押し花）、ミズ（救荒用）、ミズキ（正月飾り）、ミズコナラ、ミズタマソウ、ミズナ（茎—食用）、ミズナラ（用材、シイタケ台木、薪炭、果実—食用）、ミズヒキ（薬用）、ミズメ？（用材—硬綾・家具・器具、樹皮も）、ミゾソバ（飼料）、ミツデカエデ（用材）、ミツバ（葉—食用）、ミツバアケビ（果実—食用、蔓—細工物）、ミツバウツギ（新葉—食用、材—木釘、庭木）、ミツバフウロ（薬用）、ミヤマイラクサ（若葉—食用、毒毛）、ミヤマウグイスカグラ（果実—食用）ミヤマ



ミヤママコナ

ウズラ（観賞用）、ミヤマガマズミ（果実—食用）、ミヤマカンスゲ、ミヤマクマワラビ、ミヤマクロモジ（枝葉—香水、樹皮・根皮—薬用、材一小楊枝・かんじき、庭木、生け垣）、ミヤマタニタデ、ミヤマツチトリモチ、ミヤマナルコユリ、ミヤマハコベ、ミヤマホウソ、ミヤママタタビ（果実—食用）、ミヤマママコナ、ムカゴイラクサ（救荒用、毒毛）、ムラサキシキブ（庭木）、ムラサキヤシオ、メギ（材—薬用、染料、生け垣）、メグスリノキ（用材、樹皮—民間眼薬）、モトゲイタヤ、モミ（用材）、モミジイチゴ（果実—食用）、モミジカラマツ、モミジハグマ

や 行

ヤクシソウ、ヤグルマソウ、ヤシャブシ（果実・葉—染料、用材）、ヤダケ（用材—弓材・釣竿）、ヤナギタンボボ、ヤブカンゾウ（若葉・花—食用、薬用、観賞用）、ヤブジラミ（食用）、ヤブスゲ、ヤブソテツ、ヤブデマリ（庭木）、ヤブハギ、ヤブマメ（地下の豆を食す）、ヤブレガサ、ヤマアサクラザンショウ（若芽—香味料、果実—香辛料・驅虫薬）、ヤマアジサイ（民間薬、救荒用）、ヤマイヌワラビ、ヤマウグイスカグラ（果実—食用）、ヤマウコギ（若葉—食用）、ヤマウルシ（材—細工物、漆液の代用）、ヤマオダマキ、ヤマガシュウ、ヤマコウバシ、ヤマタバコ？、ヤマツツジ（花—食用）、ヤマトリカブト（薬用）、ヤマドリゼンマイ（若い葉柄—食用、観賞用）、ヤマナラシ（用材、マッチ軸、絆木、小箱、下駄）、ヤマニガナ、ヤマノイモ（根—食用、薬用）、ヤマハタザオ、ヤマハッカ、ヤマハハコ、ヤマハンノキ（用材—硬繖、果実・皮—染料・柔皮）、ヤマブドウ（果実—食用と加工・酒石酸、蔓—繩の代用、葉—餅を包む・タバコの代用、幼部—救荒用）、ヤマホタルブクロ、ヤマホトトギス、ヤマミゾソバ、ヤマモミジ（用材—装飾・家具、庭木、盆栽）、ヤマルリソウ？、ユウガギク（観賞用、救荒用）、ユキザサ（若葉—救荒用）、ヨモギ（食用、薬用）

ら 行

リュウノウギク（薬用、觀賞用）、リョウブ（若葉—食用、用材、薪炭）、
リョウメンシダ、ルイヨウショウマ（有毒）、レンゲツツジ（庭木、挿し花、
民間薬）

わ 行

ワラビ（若葉—食用）

4. 考 察

元寺場跡・若澤寺跡とその周辺の植物目録を作成した。その結果、413種類の植物が記録できた。このうち有用植物とされるものは、210種類で、51%である。もちろん当時の生活として他のものも利用していたかも知れない。そうすると、半数以上が有用植物ということになる。今回は、元寺場跡・若澤寺跡とその周辺の植物を探っただけであるが、当時はもっと広範囲に歩き回り、有用植物を採集・利用したと想像する。また、僧侶らによって、これらの有用植物の活用方法が、一般庶民に伝承されていったとも考えられる。

植物を利用の目的でまとめると、次のような。

（1）食用としての植物（87種類）

生食あるいは煮物、浸し物、和え物等として利用したであろう。アケビ・ミヤマウキスカグラ・ミヤマガマズミ等の果実は、生食でき甘みや酸味があって美味である。ワラビの実葉、コナラやトチノキ等の果実は、充分なあくぬきをする必要がある。

ヒメウコギが多く見られたが、当時の植栽によるものだろうか。興味深い植物である。

(2) 薬用としての植物 (68種類)

化学薬品のない時代に漢方薬としての利用は充分に考えられる。煎じたり、生のまま体に塗ったり、また、イカリソウやマタタビ等は、体力の増強としての利用もあったと考えられる。ゲンノショウコは、薬効がすぐに現れることから、現在も和名の起こりとして使われている。また、驅虫薬としての利用もあったであろう。

(3) 用材としての植物 (58種類)

ケヤキ・ヒノキ等の利用は相当に多かったものと思われる。建物の建築材料として、その利用価値は高い。

(4) 鑑賞としての植物 (42種類)

これらには庭木・盆栽・挿し花等も含めてある。花を愛でるばかりでなく、花木としても植栽したことであろう。

(5) 染料としての植物 (15種類)

化学染料材料のない時代は、天然の材料から色素を抽出して、繊維を染めていた。古くからアカネ・オニグルミやカリヤスは、染料の材料として知られている。

(6) 繊維としての植物 (8種類)

クワ(orヤマグワ)の利用について、当時に養蚕の実績の有無は不明である。調査時期では、クワかヤマグワかの判定はできなかった。アカソ・クズ・シナノキやクズ等も利用したであろう。縄や蓑・背笠としての利用もあったと思われる。

(7) 薪炭としての植物 (6種類)

プロパンガスのない時代のことであるから、木々を薪炭として利用していた。食事のための煮炊き、風呂の薪、暖房用、明かり等の利用が考えられる。周辺の高木・低木の幹・枝は全てが薪炭になりうるし、また、後の木灰も肥料分として利用できた。木灰は畑の肥料分としても利用価値は高い。

(8) 信仰としての植物 (3種類)

アカマツ(門松)・ソヨゴ(榦=サカキの代用)が代表的である。これらの木々は、常緑であることから、信仰のときに利用したものであろう。(9)この他に松明、救荒用、油、煙草の代用、細工物、飼料等に利用していた。

(10)帰化植物が10種類ある。()内へ我が国への渡米年代と原産地を記した。こうしてみると、帰化植物は、エゾノギシギシ(明治時代・欧州)、オランダガラシ(明治3~4年・欧州)、クジラグサ(江戸時代・欧亜大陸)、クロバナエンジュ(大正初年・北米)、シロツメクサ(弘化3年・欧州)、ニセアカシア(明治8年頃・北米)、ヒメウコギ(昔・中国)、ヒメジョオン(明治維新直前・北米)、ヒメムカシヨモギ(明治初年頃・北米)、ヒレハリソウ(明治期・欧州)である。

このうち古くに渡來して利用されたのは、ヒメウコギである。本種は薬用を目的として渡來している。もちろん食用としての利用も可能である。古い時代に、中国から帰国した僧侶によってもたらされたものかもしれない。とのものは、意外と新しい帰化植物であるから、当時の利用は全く考えられない。

(11)こうしてみると、人々の生活上の食料、用具、材料、染料等として、植物が大きな関わりをもっていたことが分かる。現代の人々からは考えられない活用方法等を、もっと身につけていたのかも知れない。

参考文献

- 杉本順一 (1965):日本樹木総検索誌 544pp. 六月社
- 〃 (1965):日本草本植物総検索誌〈双子葉篇〉 832pp. 六月社
- 〃 (1966):日本草本植物総検索誌〈シダ篇〉 460pp. 六月社
- 〃 (1973):日本草本植物総検索誌〈単子葉篇〉 630pp. 井上書店
- 長田武正 (1976):原色日本帰化植物図鑑 425pp. 保育社

町づくりと元寺場遺跡調査

笹本 正治

1、発掘の意義について

元寺場跡は町が指定した史跡7か所のうちの一つで、町では3番目に昭和60年3月に指定された重要な史跡です。白山山中の標高1250メートル前後の、高所にある場所を、いち早く史跡指定したのは、波田町の歴史を知る上で、ここが特別な意味を、もつと考えられたからです。

この度の発掘調査も、文化財指定の延長線上にあって、破壊されることが前提になる緊急発掘ではなくて、学術的な研究調査のために行われました。日本全国で、無数といつてもいいくらい行われている発掘のほとんどは、開発にともなう緊急調査で、純粋に学術的な意図によってなされるのは極めて少ないのでですが、波田町が、町の歴史を知るために是非ともと行ったこの発掘は、こういう時期だからこそ、しっかりした目的で行った調査として、評価すべきだと言えます。

波田町にとって若澤寺の歴史は、家屋の大黒柱のように重要な柱です。若澤寺は町民が町の歴史を振り返る時に、自らに自信をもち、他地域の人に誇りうる素材ですが、その根を探ろうとするのが、今回の発掘の目的の一つでした。これを通じて町民の間に歴史への関心が深まり、町を学ぶ姿勢が出てくれば、それが本調査最大の成果になります。このことを通じて、町民が一つの心にまとまって学ぶようになれば幸せです。

当然学術調査ですから、町の歴史だけで終えてはなりません。この遺跡を、全国の山岳寺院史とのかかわり、山岳信仰史の中に位置付けていく必要があります。地域の歴史は、全国の歴史とつながっているのです。

そうした成果を、本書から読み取って頂ければと思います。

元寺場に寺院が建立される前から山はありました。遺物によれば、ここを舞台にして、縄文時代の早期から人間が活躍していたようです。また、寺が廃されてからも、山はそのまま存在しました。遺跡の東入口は、道が折れて寺に入るようになっていて、城の虎門に似た形体になっています。これはお寺の由緒を前提にして、ここを押さえることが地域支配の正当性になって、山城として用いられたためかも知れません。あるいは、神仏の前では暴力行為等をしてはならないという思想のもとに、戦争から逃れるために元寺場が用いられたのかも知れません。いずれにしろ、寺がなくなつてからも、その記憶は現在まで受け継がれ、地域の人にとって、元寺場は特別な場所だったのです。どんな地域でも歴史は重層的に存在し、一つの時代だけで完結するわけではありません。また、歴史の主人公は領主や僧侶ばかりではないはずです。その一端に、こうして科学的なメスが加えられ、明らかになることを、町民として喜びましょう。

2、波田町の未来と教育

それなら、何故多くの資金をかけてまで、町はこうした調査をするのでしょうか。私は、こうした研究は、未来を構築していくための基礎作業だと考えます。私たちの未来は、過去と現代の上に積み上げられてきます。過去及び現代の、しっかりした認識なくして、豊かな未来を築くことは不可能です。波田町の未来を考えるためには、過去の歴史を知らなければなりません。特に大黒柱のような若澤寺の歴史は重要です。

波田町の未来を背負っているのは子どもたちです。未来を産み出す子ども達に、私たちは波田町の歴史をしっかりと教えていかねばなりません。子どもたちがふるさと波田町に誇りを持ち、地域に自信を持てるようになるためには、そのような教育が必要です。ふるさとに思い入れも抱かないような子どもたちが、波田町に愛着をもって未来づくりにいそしむ

でしょうか。間違いない町の歴史の重さを教えるためにも、事実確認の調査が必要だったのです。

皆様も新聞などでご承知のことと思いますが、今の子ども達の多くは未来に夢を持っていません。また、多くの青少年が、社会の構成員だという自覚がありません。その背景には、歴史意識が極めて弱くなっていることがあります。このような社会を形成してきたことに、我々大人はなんらかの形で責任を取らなくてはなりません。何故こうなったんだろうと考えるために、歴史を学ぶ必要があります。子どもたちが未来に自信をもつためには、これまで格闘してきた先人達の歴史と、その上に築かれた今を、しっかりと地域の中で教えていかねばならないのです。

私たちは、小中学校などにお金をかけることを悪いこととは思わず、むしろ立派な学校を自慢します。それは、未来を担う子どもたちにとって教育は必要であり、その経費が将来の地域を作る資金になると見えるからです。教育の素材として、地域の歴史を調査することは大事なことです。この度の調査も、未来を作る子どもたちへのメッセージとなることでしょう。

本年から義務教育で総合的な学習が始まりますが、波田町の子どもたちが汗をかきながら元寺場遺跡に行き、その間に地形や植物、動物、昆虫などを学び、さらに遺跡で過去から現代の歴史を考えるようになれば、本調査は大変豊かな未来への贈り物になることでしょう。

各地で地域づくりが叫ばれています。地域づくりはつまるところ人づくりです。その根底には教育がなくてはなりません。子どもたちに勉強しろといっても、親が学ばなくては説得力をもちません。老人から子どもまで一緒に学んでいけるのが地域の歴史です。

私たちは、地域に住んでいれば、地域をよく知っていると考えがちですが、そうでもありません。互いに波田町のことを知るために、どれだけの努力をしているでしょうか。皆さん、こうした報告書を読んだ経験がどれだけあるでしょうか。ともかく、大人たちも、子どもに負けないで、波田町のことを知る勉強をする必要があります。それこそ生涯学習です。私

たち一人ひとりが波田町のことを知り、自信をもって誇れるようにしておかなければ、子どもたちはふるさとを誇るように育ってはくれません。

3. 文化財とは何か

私たちが波田町のことを学ぶ教科書こそ文化財です。文化財とは、1950年制定の文化財保護法によって一般に用いられるようになった語で、cultural propertiesの訳語です。同法では「わが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできない」、また「将来の文化の向上発展の基礎をなす」貴重な国民的財産と、文化財を定義しています。

当然のことですが、私たちが、生きている時代も、歴史を形作る鎖の一つの輪に過ぎません。私たちは過去の歴史の上に立ち、過去の文化を伝えるとともに、新たな文化創造をめざして、未来につなげていかねばなりません。我々が歴史の一齣として今を実感し、過去を学び、未来に伝えていかねばならないのが文化財なのです。文化財は未来のために指定し学ぶのです。単に保存するだけでは意味がありません。

波田町には多くの文化財がありますが、国と県の指定のものはすべて若澤寺にかかります。国指定重要文化財の田村堂は地域の誇りです。県宝の木造金剛力士像、銅造菩薩半跏像（弥勒菩薩像）、銅造伝薬師如来座像御正体残闕も極めて大事なものです。町有形文化財でも銅造菩薩立像、木造不動明王立像、真言祖師像2体、金龜多宝塔（信濃三十三番札所觀音厨子）、絹本不動明王掛軸、仁王門、長祿の参道供養碑等、17点のすべてが若澤寺に関係します。さらに、町史跡7か所のうち、若澤寺跡、水沢山元寺場跡が、若澤寺に関係します。

国民が国の文化や歴史などを知る上で重要なのが、国指定の文化財です。同様に、県民が県を知る上で重要なのが、県指定の文化財です。そして、町民が町を学ぶ上でもっとも貴重な素材が、町の指定した文化財なのです。当然町民にとって重要なのは、町指定の文化財です。自分のことを知らな

いで、他人のことばかり論ずる人はおかしな人です。ふるさとの歴史をしつかり知らずに、外国のことばかり知っても意味がありません。東京や京都の歴史を知る前に必要なのは、ふるさとの歴史です。ですから、地域の歴史や文化を学ぶ素材である町の文化財をもっと大事にし、そこから学んでいかねばなりません。その一つが元寺跡なのです。

学ぶにたるものすべてが文化財ですから、波田町はもっと独自に文化財を指定していきたいものです。そのためにも、地域の歴史や文化の独自性をもっと知らなければなりません。よく学ぶことが文化財の価値を高め、より多くの文化財を発見することになるのです。

4、地域の文化を創る

私たちは、より良い未来に向けて、より住みやすい社会を作ろうとして努力を重ねています。文化財を利用してのそうして動きの一つが、町並み保存運動でした。昭和30年代から40年代にかけての高度経済成長期に、国土の再開発が進み、全国各地に残っていた古い町並みが急速に破壊され、都市が個性を失った画一的な姿に変わりました。そうした中で、古いたたずまいを残した建造物群を、周囲の環境と一体として保存しようとしたのです。南木曾町の妻籠や柄川村の奈良井等はその代表です。これまでお荷物と見られていた古い住宅が地域の誇りになり、観光資源に変わっていきました。

観光の核に文化財を据えるのは、長野市の善光寺や松本市の松本城に限らず、日本各地に見られます。下伊那郡の高森町では富本銭、木曾郡土浦村のドングリ、下伊那郡上村や南信濃村では雛祭りが重要です。発掘品も食材も、お祭りも大事な文化財なのです。波田町でも独自の文化財を確認し、町民意識を高めたいものです。

文化財も発見から始まります。従来の価値観だけでものを見ているのではなく、新たな価値観を発見して、それを社会に訴えかけていくことによ

って、文化財はもっと大きな価値をもちます。これまでのお金が万能の時代から、さまざまなものに価値をおく、熟成した文化の時代を築いていかねばなりません。市町村では縮物行政の時代が終わり、文化の時代が始まろうとしています。本物の文化を理解し、また新たな文化を創造するためには、文化財こそ教科書です。この遺跡調査は、そうした学びへの町としての素材提供なのです。

5、今後に向けて

文化財は今日作って明日できあがるというものではありません。財政的に豊かだから、人口がたくさんあるからといって、急激に増やすことは不可能です。地域の歴史が凝縮されていて、代替のきかないものが文化財なのです。文化財は作り上げ、それを豊かにし、維持してきた先人達の努力と汗の結晶です。だからこそ、文化財が地域の誇りになり、よその人を引き付けるのです。

忘れていいのは、文化財は人間が作ったものであるということです。歴史の産物（文化財）で潤っている市町村はたくさんあります。しかし、多くはその上にあぐらをかくだけです。私たちは、未来に向けて新たな文化財を残していくかねばなりません。将来に向けて文化の種をまき、木を植え、将来的人たちが私たちの育てた文化を感謝して、有効に活用してくれるようになりたいものです。

私たちは、新たな問題を発見し、学ぶことによって、新たな文化もできると信じます。今、私たちの時代に史跡の発掘をすべて行ってしまっては、未来に学ぶことができなくなります。私たちはここがわからないと、わからない点をしっかりと確認し、数百年先のもっと発達した考古学によって、この問題に解答をもらってもいいはずです。この時点で、私たちは何が不明か、この発掘を通じてだけでなく、町の文化そのものに対して課題を確認していきたいと思います。

おわりに――

元寺場遺跡のこもれびを浴びて一休みしていますと、ふっと眼前に草堂が現れ、墨染めの衣を纏った僧侶たちの読経の声が聞こえています。そして、元寺場の試掘によって発見された幾つかの遺物片を見ていますと、いにしえの山寺で営まれていた生活への想いが膨らみ、日に見えない歴史が、何枚かの絵として具体的に見えてきます。

波田町教育委員会では、心の時代、共生の時代と言われる今、波田町への郷土愛を高め、豊かな歴史につながる郷土の今後の在り方を考えるために、歴史につながる先人の歩みを、子供達をはじめとする町民の皆様に正しく伝えることが、何より大切であると考えました。そこで、今回、白山信仰にまつわる白山一帯、とりわけ幻とも言われてきた元寺場遺跡や真言宗若澤寺跡などを、学術的に調査し、波田町の歴史を明らかにしていくことに致しました。

この度、元寺場遺跡の発掘調査が、国と県、そして、町当局の深いご理解とご支援を得て実現し、息の長い若澤寺総合調査の第一歩が踏み出せましたことに、心より感謝を申し上げます。これも偏に、調査指導に当たられた信州大学の笹本正治先生・牛山佳幸先生、試掘調査に当たられた県埋文センターの市川隆之先生、菅野小学校の原明芳先生、そして、地質・植生・陸水等の調査に当たられた横内文人先生・松田行雄先生、また、町文化財保護委員会の百瀬光信委員長さんはじめ委員の皆様と田中昭三前委員長さん、そして、急峻な山道を何回も上り下りしての試掘や遺物整理に当たられた大月康雄さん・波多腰忠行さん・藤沢高雄さん（昨年ご逝去、慎んでご冥福をお祈りします。）、信大の学生さん達の、献身的なご支援・ご協力の賜物あります。ここに、衷心より感謝と御礼を申し上げ、終わりの挨拶に代えさせていただきます。

教育長 関 義弘

若瀬寺を探るⅠ
元寺場遺跡～元寺場遺跡調査報告書～

平成14年3月発行

編　集　長野県波田町教育委員会
発　行　長野県東筑摩郡波田町4417-1
印　刷　カシヨ株式会社
長野市西和田286

100円
本紙は古紙混用率100%再生紙を使用しています。



長野県波田町教育委員会